中世における教皇と司教の選舉

町田實秀

舊稿「カトリック教會の選舉と多數決原理」(一橋論叢、二十八卷五號、昭和二十七年十一月)は、各般の事情から、文獻や史料の涉獵と検討に聊か缺くるところあり、その上、紙數に制約を受けて、論述に意を盡し得なかつたことを遺憾としていたが、このたび本年報に執筆の機會と十分な紙數とを與えられたので、その後入手し得た若干の文獻を參酌し、稿を新にすることを得た。選舉の方式に關する舊稿の後半よりは、前半について特に詳論を試みたので、表題を改めたが、後半についても譯語の二三を改めたことを許されたい。(昭和三十一年九月記)

- 一 序論——司教と教皇、ならびに教會法上の選舉
- 二 教皇の選舉に對する俗權の干渉
- 三 一一七九年の選舉法と多數決原理の採用
- 四 司教の選舉に對する俗權の干渉
- 五 一二一五年の選舉法と選舉方式の確立
- 六 全會一致と多數決原理

中世における教皇と司教の選舉

原始キリスト教會は「エクレスシア」(ecclēsia)⁽¹⁾すなわち「神の民の集り」と呼ばれ、そこにおいて人々はキリストと一體をなしていた。キリストの死後、使徒時代には、キリストの復活を信じ救いの聖寵を求める人々が二人でも三人でも集れば、キリストの中に在り、⁽²⁾「キリストの在るところ、そこにエクレスシアあり」(ubi christus, ibi ecclesia)といわれたが、使徒 (apostolos) や豫言者 (prophetas) や教師 (rabbi) その他、何等かカリスマをもった人が巡廻して教會の指導に當ったから、⁽³⁾平等社會から不平等社會へと移行する芽を教會は早くからもっていた。

ところで、これら巡廻傳道者の不在中は、信徒の中で、神の召命を強く感じた人々や、早く改宗した人々が、或は信徒たちから選舉され、或は使徒から任命されて、禮拜を指揮し事務を管理した。これらは、監督 (episcopos) とか長老 (presbyteros) とか執事 (diaconos) とかと呼ばれたが、⁽⁵⁾これらの稱呼は、ただ役割を指しただけで、特定の職務をもった人を意味したのではなかったから、二世紀頃までは、しばしば混同して用いられていた。⁽⁶⁾ところが三世紀頃になると、これらの職務が區別され、名稱が固定してくる。すなわち、聖餐式が次第に重要な儀式となり、各種の祕蹟⁽⁷⁾が制定されるとともに、教會の管理が必要となってきたために、特定の人が、常に聖餐式を主宰し祕蹟を授け、教會を管理統治するようになって、エписコポス (episcopos 司教) と呼ばれるようになり、これを補佐して、ミサ聖祭 (missa) を司る者はプレスブテロス (presbyteros 司祭)、財物を管理し貧者に施物を分與する仕事に従う者はディアコノス (diaconos 助祭) と呼ばれるようになって、⁽⁸⁾「司教」(episcopus) 「司祭」(presbyter) 「助祭」(dia-

cons) の職制が定まってくる。それとともに、初めは一つの教會に數名いた⁽¹⁰⁾エビスコポスが唯一人となり、ローマの司教とかコリントの司教とかと呼ばれ、教會の存在に缺くべからざるものとなる⁽¹¹⁾。蓋し、司教なしでは、聖餐式その他禮拜や行事を行うことができなくなったからである。かくして、「司教なしでは教會なし」(si quis eum episcopo non sit, in ecclesia non esse)といわれ、教會は信徒の單なる集りではなくなった。教會は、一人の司教と、これを補佐する司祭と助祭とによって構成される一個の組織體となり、信徒たらんとする者は、この制度としての教會に屬さなければならなくなり、「教會の外に救いなし」(extra ecclesiam nulla salus)といわれるようになる。と同時に、司教・司祭・助祭は、一般「平信徒」(laicus)から區別されて「聖職者」(clerus)と呼ばれ、この聖職者の階級(ordo clericalis)に入るには、平信徒は、先ず敍階(ordinatio)を受けて聖別(consecratio)されなければならなくなったが、聖職者となつてからでも、下の階級(ordo 品級)から上の階級に昇るには、一一敍階または敍品と呼ばれる儀式を必要とするようになって、聖職者の上下の位階制(hierarchia 敍階制)が發生する⁽¹²⁾。

- (1) ギリシヤ語の *ἐκκλησία τοῦ θεοῦ* (エクレシヤ・トゥー・テウ) をラテン語に音譯して *ecclesia* といつたのである。
- (2) マタイ傳、第十八章二〇「二三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり。」
- (3) コリント前書、第十二章二八「神は第一に使徒、第二に豫言者、第三に教師、その次に異能(ちから)ある業(わざ)、次に病を醫す賜物、補助(たすけ)をなす者、治むる者、異言などを教會に置きたまへり。」
- (4) プロテスタント學者は、原始キリスト教會の平等性を説き、カトリック學者は、初めから階級制が存在したと説く傾向

中世における教皇と司教の選舉

がある。

(5) 使徒行傳、第十四章二三「……教會ごと長老を選び……」ピリビ人への書、第一章一「……我ら……書をピリビに寄る……監督たちと執事たちとに贈る。」

(6) 例えば、使徒行傳、第二十章では、長老と監督とが混用されている。一七—八「パウロ……教會の長老たちを呼び、その來りし時、かれらに言ふ」。二八「聖靈は汝らを集むれ」のなかに立てて監督となし……教會を牧せしめ給ふ」。尙 Feine, *Kirchliche Rechtsgeschichte*, B. 1., 2. Aufl., 1953 (以下 Feine と略記す) S. 33; Plochl, *Geschichte des Kirchenrechts*, 2 Bde. 1953, 1955 (以下 Plochl と略記す) I., S. 61.

(7) カトリック教會が制度的に確立してからは、秘蹟 (*sacramentum*) は、洗禮・堅振・聖體・悔悛・終油・品級・婚姻の七つとなった。

(8) Plochl I., S. 61—4. 参照。

(9) 各國語では、司教は *episcopus* (拉) *bishop* (英) *évêque* (佛) *Bischof* (獨) 司祭は *presbyter* (拉) *presbyter* (英) *prêtre* (佛) *Presbyter* (獨) 助祭は *diaconus* (拉) *deacon* (英) *diacre* (佛) *Diakon* (獨) となる。

(10) 註(5)のギリヤ人への書を見よ。 (11) Feine, S. 35 頁. 参照。

(12) Feine, S. 45; Plochl I., S. 61.

唯一人の司教によって統治される各教會は、初めの間は、時と所について孤立に近い存在であったが、二世紀から三世紀にかけての頃に、遡っては使徒との繋りが出來るとともに、司教同志も、會議を通じて互に結びつき始める。二世紀後半頃から、各地の主要な教會に、使徒が創立したものだといふ傳説が生れ、それらの教會の歴代司教の系譜

が作られ始める。かくして、神はキリストを此世に送り、キリストは使徒を送り、使徒は司教を任命し、使徒が授けたカリスマ (charisma 特能) は、司教から司教へと代々伝えられてきた (cum episcopatus successione) と云う「使徒承傳」(successio apostolica) の思想が発生し、これによって、司教のみが「真理の特能」(charisma veritatis) が裏付けられ、司教の裁治權 (iurisdicchio) と敍階權 (potestas ordinis) とが基礎付けられた。このような使徒創立教會では又、二世紀末以來、しばしば司教たちの會議が行われたが、三世紀後半以來は、地方の主要な都市で、定期的に司教會議が開かれた。この會議を「公會議」(concilium, synodus) とし、これを通じて、司教と教會の地方的組織が事實上出來始める。

四世紀初め、ミラノ勅令(三二三年)によって信仰の自由が認められ、キリスト教は初めて「公認宗教」(religio licita) となったが、今まで共濟團體 (collegia tenuiorum) や埋葬團體 (collegia funeraticia) を装って、秘かに信徒を集めていた非法團體 (collegia illicita) の教會も、今や晴れて公法上の團體 (corpus) と認められ、次でキリスト教がローマ帝國の國教となるに及んで、既に事實上出來始めていた司教の地方的組織を整備して、これを、その頃確立された帝國の地方行政組織と結びつけた。先ず三二五年のニカイア (Nicaea) の公會議で、その基本的制度を定め、三二九年のアンティオキア (Antiochia) の公會議で、これを補充し、首都大司教區組織 (Metropolitan-verfassung, Provinzialverfassung) と呼ばれる教會の地方行政組織が次第に出來上る。當時、司教は、都市 (civitas) を中心として、その周邊の地域 (suburbium) にまで、その布教活動を擴げつつあったので、都市と周邊地域とを合せて司教區 (diocesis) となし、司教區の若干を含む行政區劃の縣 (provincia) を首都大司教區 (diocesis

metropolitana, provincia)となしたが、縣の首都 (metropolis) の教會の司教である首都大司教⁽⁷⁾ (metropolitannus) は、管區内の司教たちを監督し、首都で開かれる公會議の議長をつとめた。ところが、首都大司教の中で、ローマ・コンスタンチノポリス・アレキサンドリア・アンティオキア・イェルサレムの五大司教は、三世紀から五世紀半頃までの間に、自己本來の管區を遙かに越えて、廣くその地方全體にわたって裁治權をもち始め、特に總大司教 (Patriarcha) と呼ばれるようになった。⁽⁸⁾

中でもローマは、世界帝國の首都であり、政治や文化の中心として「輝ける永遠の都」(aurea Roma, urbs aeterna)であり、二大使徒、パウロ (Paulus) とペテロ (Petrus) の布教と殉教の血を以て飾られた聖都であったから、使徒承傳の思想も、ここでは早くから發生し、既に二世紀後半には、ローマの教會はパウロとペテロが創立したものと考えられ、三世紀初めには、マタイ傳第十六章一八以下に基いて、ペテロは、教會の岩 (Petra) として、キリストから「天國の鍵」(claves regni caelestis) を託された初代のローマ司教である、と信じられ、ここからやがて、ローマ司教 (すなわち教皇) の最高裁治權としての「鍵の權」(potestas clavium) が引出されるのである。ローマの司教は、既に一世紀末にコリント教會の内紛に干渉しているが、今や主の言葉をもとにして、法律的な力としての最高裁治權を強く主張し始め、⁽⁹⁾ 四世紀後半には、ローマ皇帝も、これを認めたが、⁽¹⁴⁾ 四世紀末、ローマ司教シキリウス (Sicrius) は、西ローマ全域にわたる最高立法權をも要求し、⁽¹⁵⁾ 五世紀半ばには、ローマ司教は、遂に西部における司教中の司教 (episcopus episcoporum) として「首位權」(primatus) を確立し、ローマ皇帝も、これを承認した。⁽¹⁶⁾

五世紀末に西ローマ帝國は滅んだが、ローマ教會は却って國家權力の支配から解放され、ローマ司教の權威は政治的

にも高まった。このことは又、ローマ司教の稱號の變化にも現れている。既に五世紀以來、ローマ司教は「パパ」(papa)と呼ばれたが、これはまだ司教一般の教稱に過ぎなかつた。ところが、六世紀末には、この「パパ」の稱號をローマ司教が獨占して、「パパ」すなわち「教皇」(Pope 英 pape 佛 Papst 獨)と稱するにいたつたのである。⁽¹⁷⁾

(1) ローマ・アンテ・イオキア・リオン・カルタゴ・アレキサンドリアなど。

(2) Feine, S. 34—7; Pöchl I., S. 52. 参照。

(3) 司教會議のことを、二世紀のテルトリヤヌス (Tertullianus) は、ラテン語で、コンキリウム (concilium) と云ふ、三世紀前半のディオニシオス (Dionysios) は、ギリシヤ語で、シノノス (σύνωδος) と云つたので、現代ヨーロッパ語でも、或は council (英) concile (佛) Konzil (獨) と云ふ、或は synod (英) synode (佛) Synode (獨) と云ふが、早くから、これら二つの稱呼はシノニムとして用いられるようになった。Pöchl I., S. 55. 参照。日本のカトリック教會では、公會議または司教會議といひ、プロテスタント教會では、監督會議と云つてゐる。

(4) Pöchl I., S. 41. 参照。 (5) Feine, S. 108. 参照。

(6) 三世紀頃になると信徒の數が増えた大都會では、都市の行政區劃を基礎に、司教區を更に、司牧區 (regio) に細分した。Pöchl I., S. 52. 参照。

(7) 西ヨーロッパでは、六世紀頃から、首都大司教のことを大司教 (archiepiscopus, archbishop, Erzbischof) と云ふようになった。Feine, S. 109; Pöchl I., S. 150.

(8) 三二五年のニカイア公會議で、ローマとアレキサンドリアとアンテ・イオキアの司教に、裁治權上の優位が認められた。ところが、三三〇年、ビザンチウムがコンスタンチノポリスと名付けられ、帝國の第二の首都となるに及んで、この

中世における教皇と司教の選舉

- 司教もまた、前記三大司教と同じ地位と権力とを要求し始めたが、三八一年の同地での公會議で、同地が新しいローマ (Nova Roma) と呼ばれるに及んで、その司教の權威は忽ちアンティオキアやアレキサンドリアの司教のそれを壓し、ローマの司教に次ぐ名譽上の優位が認められたが、更に四五一年のカルケドンの公會議で、イェルサレムの教會の司教も、全キリスト教會の母教會の司教であるとして、バレスチナに對する總大司教に高められた。尙、詳しくは Pöchl I, S. 147 f.; Seppelt, Papstgeschichte, 5. Aufl., 1949 (以下 Seppelt と略記す) S. 8; Sohm, Kirchengeschichte im Grundriß, 17. Aufl., 1911 (以下 Sohm と略記す) S. 48 f.; カトリック大辭典Ⅲ、三六八頁以下など参照すべし。
- (9) Feine, S. 52 f.
- (10) マタイ傳、第十六章一八「我この岩の上に我が教會を建てん (super hanc petram edificabo ecclesiam meam)」同章一九「われ天國の鍵を汝に與えん (tibi dabo claves regni caelestis)」。
- (11) テルトリッブヌスの言葉。Mirbt, Quellen zur Geschichte des Papsttums und des römischen Katholizismus, 4. Aufl., 1924 (以下 Mirbt と略記す) Nr. 55, S. 24; 尙 Feine, S. 53 f. 參照。
- (12) 九六年に、ローマ司教(教皇)クレメンヌ (Clemens) がコリント人へ送った書簡が、ローマ教會の首位權の主張の最初のもので知られてゐる。Feine, S. 102; Pöchl I, S. 49 f.
- (13) Feine, S. 102
- (14) 三七八年に、皇帝グラチアヌス (Gratianus) は、ローマ司教ダマス一世 (Damasus I.) を西ローマの司教たちに對する最高の裁判官と認めた。Feine, S. 101.
- (15) Feine, S. 102. 石原「基督教史」一七五頁。
- (16) 四四五年に、皇帝ヴァレンチヌス三世 (Valentianus III.) は、ローマ司教(教皇)レオ一世 (Leo I.) に對して、

西ローマ唯一の總大司教として、その首位權を認めたが、當時、東部でも、これを認めていたらしく、四五一年のカルケドンの公會議で、レオの教書が讀み上げられた時、参会者一同が「レオを通じて使徒ペテロは語れり」と唱えたと傳えられる。Feine, S. 103.

(17) 「パバ」は、ギリシャ語の「パパス」(Papas) から來たもので、東方教會で、一般聖職者に對して用いられていた。それからやがて、司教だけに限定して、敬稱として用いられたが、五世紀以來、ローマ司教に對しても用いられた。ローマ司教自身が初めて公に用いたのは、シンマクス (Symmachus, 498—514) であるといわれるが、六世紀末、グレゴリウス一世 (Gregorius I., 590—604) は、これを制度化した。Plochl I., S. 123. 石原「中世キリスト教研究」二〇六頁、参照。

原始キリスト教會の役員は、選舉によつて就任するのが普通であつたが、キリストや使徒によつて直接に任命されている例もあつて、まだはつきりした原則はなかつたらしいが、三世紀頃になると、司教は、司教區内の聖職者と平信徒によつて選舉されるのが慣例となる。三世紀中頃のローマの司教ヒポリトゥスやコルネリウスの選舉の話が傳えられているが、使徒承傳の思想が高まるにつれ、候補者の資格がやかましくなり、ローマやカルタゴのような由緒ある教會の司教については、近隣教區の司教たちが候補者の人選に容喙し、これらの意見に反しては、事實上選舉ができないことが多く、しばしば、そのために紛争が生じた。⁽¹⁾

そこで、三二五年、ニカイア公會議は、司教選舉の方法と首都大司教區制とを確立し、決議の第四條⁽⁵⁾において、次のように定めた。それによれば、司教選舉は、首都大司教區内の司教の全部、少くとも三人が出席して行くことを要

し、萬やむを得ず缺席する司教は書面を以て投票し、全員の投票が終れば、それで選舉は完了するが、尙、首都大司教の承認が必要とされている。缺席者にも書面投票をさせて、全員の投票による全會一致を要件としてはいるが、決して嚴密な意味での全會一致ではなく、第六條⁽⁶⁾は、二三人の、ただ反對せんがための反對は、これを無視してよろしい、と記している。

ニカイアの決議は、選舉の際の司教と首都大司教の役割を規定するだけで、平信徒の選舉權には一言も觸れていないが、平信徒も選舉に参加したらしく、五世紀頃になると、一般に司教は、その司教區を含む首都大司教區 (diocesis metropolitana et provincia) 内の司教たちと首都大司教が参加して、その司教區 (diocesis) 内の聖職者と平信徒によって選舉され、教皇も、もともとローマの司教に過ぎないから、ローマの首都大司教區に含まれるローマ市周邊の七司教區の司教たちが参加して、ローマの聖職者と平信徒によって選舉されることになり、「教會法上の選舉」(electio canonica) は「聖職者と平信徒によって」(clero et populo) 行われなければならない、という原則が確立する。⁽⁷⁾

西ローマ帝國は五世紀末に滅亡したが、東ローマ帝國は、益々東方的獨裁專制國家へと進展したため、選舉權は次第に制限され、國家の干渉が顯著となる。選舉に参加する平信徒 (laicus, populus) は、司教座聖堂 (cathedra) の存在する都市の有力者 (primores civitatis) だけに限られ、これらの有力者と聖職者とが、近隣の司教たちとともに選舉を行うようになったが、六世紀になると、五四六年と五六四年のユスチニアヌス帝の二つの勅法 (新勅法集 Novellae に收められた第二二三條と第一三七條⁽⁸⁾) にも明らかな通り、聖職者と平信徒中の有力者が候補者三人を推

薦し、この中から司教たちが一人を選定することになり、やがては、この推薦権も皇帝の手に移って、選挙は次第にその意義を失ってゆく。⁽⁹⁾

これに反して西ヨーロッパでは、後々までも平信徒の参加が行われ、司教も教皇も、敍階に先だち、先ず以て聖職者と平信徒によって選挙されることが教會法上の原則として守られ、これを「教會法に従った」(canonice)選挙とか「教會法上の選挙」(electio canonica)とかといって、俗権の干渉を排除する標語となしたのであるが、平信徒は、次第に、教會事項に積極的に関與すべきではなく、ただ服従すべきものであるとされ、教會は、廣義では、依然として「信徒の團體」(universitas fidelium)であるとされながら、事實上は、狭く解されて「聖職者の團體」(universitas cleri)となつてゆき、平信徒は、僅かに有力者、すなわち、司教選挙については、ローマの貴族が、参加して選挙が行われ、や聖堂の家人(Dienstmannen, Ministerialen)が、⁽¹⁰⁾教皇選挙については、ローマの貴族が、参加して選挙が行われ、一般平信徒は、單に事後的に、歡呼の聲で贊成の意思表示をなすに過ぎなくなつたが、選挙に直接參與する聖職者の範圍もまた次第に限定されてゆき、遂に、教皇選挙については「樞機卿」(cardinales)、司教選挙については「司教座聖堂參事會員」(capitulares)だけが選挙権を獨占し、しかも、それらが構成する法人的統一體としての「樞機卿會」(collegium cardinalium)や「司教座聖堂參事會」(capitulum)が嚴密な法律的意味での選挙権の主體であるとされ、その統一的意思を形成するについても、初めは、カトリックの全體主義思想とゲルマン的協同體思想とが結びついて、全會一致を原則としていたが、次第にこれが困難となるにつれ、多數決が認められるようになった。といえ、中々全會一致主義を棄てかねていたのが實情であつた。

しかし、ここに到達するまでには、初期のカトリック教會で確立された選舉の原則を永らく歪めていた俗界からの干渉、殊に帝王や貴族の干渉を、先ず以て排除しなければならなかった。ローマ皇帝について、イタリアに侵入し來たゲルマン部族の諸王や、フランクの諸王の干渉、次では、ドイツ皇帝のイタリア政策に煩わされて選舉の度毎に起った紛争や、聖職敘任權の争の時代を経て、ようやく教皇の優位が認められ、初めて、教皇や司教の選舉が制度的に確立されるのである。

(1) 例えば、イェルサレムの教會で、十二使徒が信徒たちに呼びかけて、七人の執事 (diaconos) を選ばせている。使徒行傳、第六章三一六「汝らの中より……七人を見出せ……集れる凡ての者 を選びて……使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて、手を、その上に按けり。」

(2) 例えば、ローマの初代司教(教皇)ペテロ (Petrus) は、キリスト自身により、四代目の司教(教皇)クレメンス一世 (Clemens I.) は、シラクサの「*シラクサ*」に任命された。Hinschius, Das Kirchenrecht der Katholiken und Protestanten, 1869—1897. (以下 Hinschius と略記す) I., S. 217. 参照。

(3) ヒッポリトゥス (Hippolytus, 217—235) は、カリストトゥス一世 (Calixtus I., 217—222) に對する對立司教(教皇)として、選舉されたのであるが、「すべての平信徒によつて選舉され、罪を犯したることなき者であったのは、司教として被附された」(episcopus ordinatur, qui a cuncto populo electus et inculpatus est) と傳えられ、コルネリウス (Cornelius, 281—288) は、「聖靈に導かれたかのように、全會一致で選舉されたこと」を、キプリヤヌス (Cyprianus) の書簡が傳えている。Plochl I., S. 69; Caspar, Geschichte des Papsttums, 1930—33 (以下 Caspar と略記す) II., S. 22, 49. 参照。

(4) Feine, S. 39, 参照。

(5) can. 4, *Ἐπίσκοπον προσηξει μάξιμα μὲν ὑπὸ πάντων τῶν ἐν τῇ ἐπαρχίᾳ καθίστασθαι: εἰ δὲ θυγατρὸς εἶη τὸ τοιοῦτον ἢ διὰ κατερείνουσαν ἀναγκῆν ἢ διὰ μῆκος ὁδοῦ, ἐξαιτατος τρεῖς ἐπι τὸ αὐτὸ συνεργημένοι, συμπήφων γινόμενων καὶ ἀπόρων καὶ συνθεμένων διὰ τραμμάτων, τότε τῶν χειροτονία ποιεῖσθαι: τὸ δὲ νόμος τῶν γινόμενων δίδωσθαι καὶ ἕκαστην ἐπαρχίαν ἐφ' ἑαυτοῦ μνησπολιτικῆν.* (司教は首都大司教區に於て總ての者(＝司教)に於て選ばれることが最も適當である。しかし、もしくはやうなことが急用または遠路に於て困難であれば、どうしても三人が同じこと(＝選舉)のために集められ、選舉人が來て、缺席者が書面によつて集められ、選舉が行われ、その結果の承認が、各首都大司教區毎に、首都大司教によつて與えられることが適當である。) Mirbt, Nr. 109, S. 44,

(6) can. 6, ... *ἐὰν μέρτοι: ..... ὅσα ἢ τρεῖς δι' ὀλίγων φιλομερικῶν ἀντιλέγων, κραιτέρω ἢ τῶν κλειδίων ψήφους.* (しかし、もし二三人が個人的な敵對心から反對しても、多數の者の投票が盛んなこと) Mirbt, Nr. 111, S. 45, 第四條と第六條については Feine, S. 108; Plöchl I., S. 174, 参照。

(7) Feine, S. 108; Hinschius I., S. 217,

(8) *Novellae* (Mommson, Schöll, Kroll) 123, cap. 1., S. 594—5; 137 cap. 2., S. 696—7.

(9) Hinschius II., S. 514; Plöchl I., S. 174f.

(10) Gierke, *Das deutsche Genossenschaftsrecht*, 1868—1913, I., S. 287. 参照。

二

キリスト教をローマ帝國の國教と認めてから、皇帝は、帝國の主權者として、しばしば教皇を恣に任免し、選舉に干渉した⁽¹⁾が、ホノリウス (Honorius, 468—482) の如きは、更に積極的に、立法措置をさえ講じて「教皇選舉について、二重選舉となつた時には、兩候補者とも、これを承認することを得ず、選舉を仕直することを要す」と規定して、全會一致を選舉の要件とした。しかし、國家が制定した最初の教皇選舉法は、その後殆ど守られなかつた⁽²⁾。

西ローマ皇帝に代つてイタリアの支配者となつたゲルマン部族の王たちも、しばしば選舉に干渉したが、教權の強化に伴い、反撃を受けた⁽³⁾。

教皇シンプリキウス (Simplicius, 468—482) の時代にイタリアの王となつたオドアケル (Odoacer, Odovaker, 476—486) は、シンプリキウスの死後、後繼者の選舉のために集つた聖職者たちの前に、王の代理としてローマ市長官バシリウス (Basilius) を派遣し、前教皇の遺勅と稱して、「王の代理に相談なしに教皇選舉を行ふべからず」と嚴命し、フェリックス二世 (Felix II, 482—492) の選舉を強要した⁽⁴⁾。

四九三年、オドアケルを殺して、テオドリク一世 (Theoderich I, Theodoric, 483—526) はイタリアに東ゴート王國を建設した。このアリウス派の新支配者に對抗して、教皇は「カトリック・ローマ教會の司教」(episcopus ecclesiae catholicae Romanae) と稱したが⁽⁵⁾、折柄、ビザンツの東ローマ皇帝との關係が緊張して⁽⁶⁾、ローマの聖職者の中に反ビザンツ派が現れたため、教皇アナスタシウス二世 (Anastasius II.) の死後、選舉が紛糾して、シンマクス

(Symmachus, 488-514) とラウレンチウス (Laurentius, 493-506) との二重選挙となった。⁽⁷⁾ テオドリク王は「最初に多數から選ばれた者を承認す」と宣言して、シンマクスの正統性を認めたが、ラウレンチウス派が、尙も抗議をつづけたので、四九九年三月一日、シンマクスは、ペテロ聖堂に公會議を開いて、新に選挙法を布告した。曰く、「教皇が突然死去し、自己の後繼者の選立について (de sui electione successoris) 豫め決定し得なかつた (non possit ante decernere) 時には、聖職者全體の全會一致の選挙が決定した (in unum totius inclinaverit ecclesiastici ordinis electio) 者は、直に、ローマ司教として彼階を越へ、萬一意見が分れた時には、多數の意見が決定す (vincat sententia plurimorum)」と。全會一致を原則としながら、例外的に多數決をも認めて、教會の自主性を主張した。ところが、その後もラウレンチウス派は、シンマクスに對する非難攻撃を續けたので、審理のために、テオドリク王は、五〇一年と五〇二年に、ローマに公會議を召集したが、却つて會議は「首座 (すなわち教皇座) は何人によつても裁判さるべきものに非ず (prima sedes a nemine indicatur) 神の審判に任ざるべきである」として、教皇に對する批判を封じ、非難の根據となつた會でのフェリックス二世の選挙の際のオドアカルの主張に言及して、「教會事項に對する俗人の不當の干涉である」と宣言した。⁽¹⁰⁾

次の教皇ホルミスダス (Hormisdas, 514-530) とヨハネス一世 (Johannes I, 521-530) の選挙は幸にして俗權の干渉を受けなかつたが、その間に、次第に東ゴート王の支配が強化され、その壓力のもとに、フェリックス三世 (Felix III, 526-530) が選挙された。ところが、即位後間もなくテオドリク王が死んだので、ローマの聖職者の中に、親ビザンツ派が擡頭し、親ゴート派と勢力を争っていたので、後繼者の選挙が紛糾する惧れがあつた。そこで、死の近き

を感じたフェリックスは、聖職者やローマの貴族の前で、首席助祭ボニファチウス (Bonifatius) を後繼者に指名し、そのしるしとして、教皇の聖衣 (Pallium) を授けたが、それにもかかわらず、フェリックスの死後、司祭の大多数六十名もが、助祭ディオスクルス (Dioscurus) を教皇に選び、ラテラノ宮殿で、敍階式を行ったので、ボニファチウス二世 (Bonifatius II, 580—593) の敍階式は他の聖堂で行わざるを得なかった。幸いディオスクルスは即位後僅か二十八日で死んだので、ボニファチウスが一般に教皇と認められた。ボニファチウスも、フェリックスと同様に、在世中に、後繼者としてヴィギリウス (Vigilius) を指名したが、聖職者たちの激しい反対にあって、斷念せざるを得なかった。死後、後繼者の選挙につき、またもや騒動が起ったが、メルクリウス (Mercurius) が選ばれて、教皇ヨハネス二世 (Johannes II, 588—603) と稱した。即位後改名した最初の教皇である。ヨハネスに次で、アガベトゥス (Agapetus I, 586—590) 在位僅か一年で死するや、テオドリック王の後繼者テオマハト (Theodahad, Theodat) はシルヴェリウス (Silverius, 586—597) を教皇に任命した。聖職者たちは、これを選挙権の侵害なりとして抗議し、改めて選挙を行った。折柄、ヴィギリウスが教皇座の篡奪を企てたが成らず、ようやくシルヴェリウスの死後、教皇ヴィギリウス (Vigilius, 597—555) として一般に承認された。⁽¹³⁾

- (一) 例えば、コンスタンチウス二世 (Constantius II) は、三五五年にローマ司教 (教皇) リムリウス (Liberius 322—336) を追放し、代りに、助祭フェリックス (Felix) を位に即けたが、ローマ市民の認むるところとならず、三五八年ローマに歸還したリムリウスが歡呼して迎えられ、再び位に即した。Feine, S. 105; Seppelt, S. 10 f.; Caspar, I., S. 188. 参照。リムリウスの死後、ダマスス二世 (Damasus I., 366—384) とウルシヌス (Ursinus, 366—387) との二重選挙とな

り、血を流して兩派が争ったので、遂に、ローマ帝國西部の皇帝ヴァレンチアヌス一世 (Valentinus I.) が干渉し、ダマスを承認し、ウルシヌスを追放した。ダマスの死後、ウルシヌスが再び、ローマの司教座 (教皇座) をねらったが、ローマの聖職者と平民徒は、シリキウス (Sirlcius, 331-336) を選挙した。シリキウスは、初めて公に、教皇 (papa) と稱したローマ司教として知らる。Feine, S. 102; Seppelt, S. 12; Plochl I., S. 124. 参照。

- (2) 教皇ゾシムス (Zosimus, 417-418) の死後、ボニファチウス一世 (Bonifatius I., 418-422) ローマの聖職者の多数から、古來の方式に従って選挙され、ローマの市民から歡呼して迎えられたにもかかわらず、助祭たちは、助祭エウラリウス (Eulalius, 418-419) を對立教皇として立てた。ローマ市長官シンマクス (Symmachus) の事實を曲げた報告に基き、西ローマ皇帝ホノリウスは、四一九年に、エウリキウスを承認したが、實情を知るや、直に承認を撤回し、兩者を招いて妥協させようとして成らず、兩者のローマ市からの退去を命じた。その後、ようやく自己の選挙の合法性が認められて位に即いたボニファチウスの求めに應じて、ホノリウス帝が制定公布したのが、この選挙法である。Caspary I., S. 360-365; Plochl I., S. 124f. 参照。

(3) Feine, S. 105. 参照。

(4) Caspar II., S. 23 f.; Seppelt, S. 27; Plochl I., S. 125.

(5) Neuh, Die Kirche des Mittelalters, 1946 (以下 Neuh と略記す) S. 19f. 参照。

(6) コンスタンチノポリスの總大司教アカキウス (Acacius) をローマ教皇が審判したのが原因である。Neuh, S. 20. 参照。

(7) 反ビザンツ派の多数の聖職者が助祭シンマクスを選挙したのに對して、親ビザンツ派は、首席司教ラウレンチウスを對立教皇として立てた。兩者は、同じ日に敍階されたが、前者の選挙が、方式通りラテラノ宮殿で行われたのに反し、後者のそれは、マリア・マジヨレ聖堂で行われた。兩派互に自派の選挙の合法性を主張してやまず、遂に市街戦にまでな中世における教皇と司教の選舉

- したので、兩派は、ラヴェンナ (Ravenna) に赴き、争の裁決をゴット王に求めたのである。Caspary, II., S. 88.
- (8) この會議には、シンマクスの屬した首都大司教區内の司教七二名の外、司祭七四名、助祭七名が集った。Caspary, II., S. 89.

- (9) Mirbt, Nr. 192, S. 88. 尙 Caspary, II., S. 89; Hinschius, I., S. 218; Pöchl, I., S. 126. 参照。
- (10) Caspary, II., S. 109—112; Hinschius, I., S. 219; Seppelt, S. 28 f. 参照。
- (11) Hinschius, I., S. 219
- (12) Caspary, II., S. 193—6; Seppelt, S. 31. 参照。
- (13) Seppelt, S. 31 f.; Hinschius, I., S. 227.
- (14) 前にホニフマテウスに後繼者として指名され、聖職者たちに反對された人。
- (15) Seppelt, S. 32 f.; Pöchl, I., S. 127. 参照。

教皇ヴィギリウスの時代に、十八年に及ぶ戦の後、東ローマ帝國はようやく東ゴット王國を滅ぼしてイタリアにおける失地を回復したが、そのために、東ローマ帝國の壓力が再び教皇廳に及び始めた。ユスチニアヌス帝 (Justinianus) は、折柄死去したヴィギリウスの後繼者として、助祭ペラギウス (Pelagius, 561—574) を選舉させた。⁽¹⁾ 五六一年三月三日にペラギウスが死去してから、ヨハネス三世 (Johannes III, 574—577) が七月十七日に敍階されるまで、四ヶ月半も空位であったのは、選舉の認證を、はるばるコンスタンチノポリスの皇帝に求めなければならなかったからである。⁽²⁾

ところがヨハネスの時代に、ランゴバルド族がイタリアに侵入し來り、東ローマの屬州であった地方を攻略して、

五六八年に、北イタリアのパヴィア (Pavia) を首都として、建國し、次のベネディクトゥス一世 (Benedictus I, 575—590) の時代に、ローマに攻め寄せて來たので、教皇は、東ローマ皇帝とフランクの王に救を求めたが空しく、ランゴバルド軍によって、ローマは遂に包圍されてしまった。従つて、次のペラギウス二世 (Pelagius II, 579—590) の選舉の際には、コンスタンチノポリスとの連絡がとれず、やむなく皇帝の認證なしに敍階が行われた。

ランゴバルドの勢力の擴大により、東ローマの支配領域は著しく局限されたが、尙八世紀中頃までは、ラヴェンナ (Ravenna) に東ローマの總督 (Exarchus) を置き、ローマ地方とアドリア海沿岸地方とを支配していたので、教皇は依然として、選舉の認證を皇帝に求めなければならなかつた。ところが、そのために、七世紀初めには、選舉の認證を待つて敍階が行われるまで、常に半年ないし一年の空位が續いた。そこでボニファチウス五世 (Bonifatius V, 619—625) の次の時代から、もはやわざわざコンスタンチノポリスに行かないでも、ラヴェンナの總督から認證を受ければよいこととなつたが、總督が教皇選舉の認證權を濫用したので、六八〇年に、再びコンスタンチノポリスで、皇帝自ら認證を與えることになつた。そのためか、六八二年のレオ二世 (Leo II) の即位の前には一年半以上、六八四年のベネディクトゥス二世 (Benedictus II) の即位の前には一年間も、空位が續いた。そこで教皇側は、六八四年に、皇帝に願つて、認證權を再びラヴェンナの總督に任せて貰つた。ところが、この認證權が、しばしば二重選舉の裁決權にまで發展することがあつた。二重選舉となつて決し難い時には、第三候補者を——例えば、ヨハネス五世死後の選舉の際にはコノン (Conon, see 87) を——立てて、妥協をはかつたり、このような妥協案が容れられなかつた時には——例えば、コノンの次の選舉の場合のように——總督に争の仲裁を求めたりした。しかし、このよう

な總督の認證も、ランゴバルドの勢力がひろまり、東ローマの影が薄くなるにつれ、次第に行われなくなり、七三一年のグレゴリウス三世 (Gregorius III, 731-741) の選舉の認證を最後として、その次のザカリアス (Zacharias, 741-752) やステファヌス二世 (Stephanus II, 752-757) の選舉は、全く俗權の干渉なしに行われた⁽¹¹⁾。

- (1) Seppelt, S. 35; Feine, S. 105; Hinschius I, S. 220; Pöchl I, S. 127.
- (2) Seppelt, S. 36; Caspar II, S. 304. (3) Seppelt, S. 36.
- (4) Seppelt, S. 31; Pöchl I, S. 128.
- (5) 教皇の死亡日と後繼者の敍階日とを照合して見ると、毎同長い空位が続いたことがわかる。ペラギウス二世 (Pelagius II.) は五九〇年二月七日に死去し、次のグレゴリウス一世 (Gregorius I.) は同年九月三日に敍階されている。この教皇は六〇四年三月十二日に死去し、次のサビニアヌス (Sabianus) は同年九月十三日に敍階されている。この教皇は六〇六年二月二十二日に死去し、ボニファチウス三世 (Bonifatius III.) が、ようやく翌六〇七年二月十九日に敍階されている。ボニファチウス三世は在位僅か九ヶ月で十一月十二日に死去し、ボニファチウス四世 (Bonifatius IV.) が翌六〇八年八月二十五日に敍階されている。この教皇は六一五年五月八日に死去し、デウスデデイトゥス (Denseditus) が同年十月十九日に敍階されたが、六一八年十一月八日に死去し、ボニファチウス五世 (Bonifatius V.) が一年以上もたつて、ようやく六一九年十二月二十三日に敍階されている。キリスト教用語辭典、四〇一頁の歴代教皇表に據る。
- (6) Caspar II, S. 518. (7) Caspar II, S. 607; Seppelt, S. 48.
- (8) アガトー (Agatho) が六八一年一月十日に死去してから、ようやく六八二年八月十七日に、レオ二世が敍階され、レ

オが六八三年七月三日に死去してから、六八四年六月二十六日に、ベネディクトゥス二世が敘階されている。

(6) Seppelt, S. 48; Plochl, I., S. 128.

(10) 六八五年、ヨハネス五世 (Johannes V.) の後繼者について、ローマの聖職者 (clerus) と軍部 (exercitus) との意見が對立した。聖職者は、首席司祭ペトルス (Petrus) を立て、軍部は、司祭テオドルス (Theodorus) を立て、兩派それぞれ別の場所集まって、選挙を行わんとしたが、何とかして一つにまとめようとして、兩派の間を使者が幾度も往復して折衝を重ねたが、中々妥協が成立しなないので、一應、兩候補者を引込め、改めて、文武の代表者 (indices una cum primatibus exercitus) たちが相談の上、第三候補者として、老年の司祭コロンを立て、ようやく、これが當選して、教皇となった。ところが、在位僅か十一ヶ月で死去し、再び二重選挙となった。さき一度、教皇候補者となり今は首席司祭となっていたテオドルスと、首席助祭パスカリス (Paschalis) との二重選挙となり、兩派譲らず、遂に又もや、文武の代表と聖職者の大部分が集って、相談した結果、第三候補者として、司祭セルギウス (Sergius) を立て、その選挙と敘階を強行して、教皇セルギウス一世 (Sergius I, 671-70) となした。テオドルス派は直に同調したが、パスカリス派は中々肯じなかったので、遂にラヴェンナの總督に仲裁を求め、セルギウスの選挙の認證が與えられた。Seppelt, S. 48; Caspar II., S. 621, 623; Hinschius I., S. 225. 参照。

(11) Seppelt, S. 56; Hinschius I., S. 225-228; Plochl I., S. 284.

七五一年、ランゴバルド王アイストゥルフ (Aistulf) ラヴェンナを攻略し、更にローマに迫らんとした。教皇ステファヌス二世は、折柄フランクの王位を継いだピピン (Pippin, Pépin, 701-68) に救を求む。アルプスを越えて救援に來たピピンは、七五四年冬、カンパニアのポンティオン (Pontion) を、教皇に、ローマ教會の保護 (defensio)

を約し、更にキルシー (Kiersy, Quierzy) の國會で、これを承認し、ランゴバルドをして、七五一年以後奪取した地方を教皇に割讓させることと、これらの地方を教皇領 (patrimonium Petri) として認めることを決議した。⁽²⁾ これを徳として、教皇は、ピピンと、その子に、従来ラヴェンナの總督が用いていた「ローマの保護者」(patricius Romanus) の稱號を贈⁽³⁾た⁽⁴⁾。

ステファヌス二世の次に、對立教皇を排して位に即いたパウルス一世 (Paulus I., 757-767) の死後、一平信徒が武力によって擁立され、僅か十三ヶ月ではあったが、教皇コンスタンチヌス二世 (Constantinus II, 767-769) と稱した事件に鑑み、これを排して、正統の教皇として、位に即いたステファヌス三世 (Stephanus III, 769-772) は、フランクの司教十三人⁽⁵⁾を加えて、七六九年春、ラテラノ宮殿で公會議を開き、教皇座篡奪者の再び現れることを防止する目的を以て、教皇選舉法を布告した。新選舉法は劈頭まず「平信徒は勿論のこと (nullus laicorum)」、聖職者といえども、カルディナル助祭またはカルディナル司祭となつた者 (diaconus aut presbyter factus fuerit cardinalis) でなければ、神聖な教皇の位に即くこと (ad sacrum pontificatus honorem promoveri) を得ず」と定めて、教皇候補者から、平信徒と一般聖職者とを排除するとともに、更に「教皇に敍階を與へべき者は、カルディナル司祭かカルディナル助祭のうちの一入たるべきことを要す (oportebat, ut ..... in apostolatus cunien unus de cardinalibus presbyteris aut diaconibus consecratur)」となして、教皇候補者の資格を限定した。それとともに「今後、平信徒の教皇選舉に關與することを許さず (nulli unquam laicorum ..... invenire in electione pontificis)」となして、聖職者だけに選舉權を認め、ローマ市の (Romanae urbis) 平信徒に過ぎない貴族 (optimates) や一般市民 (cives)

は、教皇が選舉されたあとで (postquam pontifex electus fuerit) 事後的に、贊成の喝采をして、これを迎える (ad salutandum eum) 權利を有するに過ぎならぬものとされた。⁽⁸⁾

次のハドリアヌス一世 (Hadrianus I, 772-786) レオ三世 (Leo III, 795-816) ステファヌス四世 (Stephanus IV, 816-817) の選舉は、いずれも七六九年の選舉法に従って行われた。⁽⁹⁾ ハドリアヌスは、次第に加重されるランゴバルドの壓力に耐えず、救をフランクの王カール (Karl, 768-84) に求む。カールは、直に軍をイタリアに進めたが、七七四年ランゴバルドの首都パヴィア (Pavia) を攻圍中、ローマを訪れ、復活祭に、父ビピンの贈與約束を更新した。遂にパヴィアを陥れてイタリアの支配權を握ったフランクの王 (rex Francorum) は、稱號を追加して「フランクの王にして且ランゴバルドの王」(rex Francorum et Langobardorum) と稱したが、その上にまた、自ら「ローマの保護者」(patricius Romanus) と號したのは、彼の自覺の現れであろうが、既に敵から教皇と教皇領を保證する必要のなくなった「保護者」は、今や事實上、教皇領の支配者であった。⁽¹⁰⁾ それ故にこそ次の教皇レオ三世は、選舉の妨害を受くるや、カールのもとに逃れたのであり、治安回復のためにローマに來たカールに帝冠を授けたのであるが、ローマの保護者から、八〇〇年に、全ヨーロッパの皇帝 (imperator) になつたフランクの王に、その後、教皇選舉の結果が一報告されたのは、蓋し當然のことであらう。⁽¹¹⁾

次のパスカリス一世 (Paschalis I, 817-824) の選舉の報告が、八一七年に、フランクの王ルートヴィヒ (Ludwig der Fromme, 814-840) になされた時、王と教皇との間に協約 (pactum) が締結された。會て七五四年にビピンが約し、七七四年にカールが更新した贈與約束によつて、教皇が得た教皇領が、改めて確認されるとともに、王は「わが

王國內のなにびとも、フランク人もランゴバルド人も、教皇の選舉に干渉することを許さず (nullus ex regno nostro, aut Francus aut Langobardus ... licentiam habeat ... electionem faciendi) とし、⁽¹²⁾ 「教會の慣習法に従つて」 (more canonico) 選舉と敍階が行わるべきことを認めた。

八二四年、パスカリスの葬儀のさなかに暴動が起きたが、フランクの王の支持をたのむ貴族黨は、自派の候補者をたててエウゲニウス二世 (Eugenius II, 824-827) となすことに成功した。エウゲニウスの即位後間もなく、フランクの王ルートヴィヒは、その子ロタール (Lothar) をローマに派し、秩序の回復を講じさせたが、この時、ロタールが布告した「ローマ勅令」 (constitutio Romana) は、「一應、教會法に従つた選舉を認めはしたが、ローマ市民に「皇帝への忠誠の誓を皇帝代理の前でなした後でなければ、敍階を行わない」旨を誓約させた。會て、東ローマ皇帝や、その代理であるラヴェンナの總督がなしたところの教皇選舉の認證が、今やフランクの王によって、再び行われることになったのである。⁽¹³⁾

その後、約半世紀間、ヴァレンチヌス (Valentinus, 827)、『グレゴリウス四世 (Gregorius IV, 827-844)』、『セルギウス二世 (Sergius II, 844-847)』、『レオ四世 (Leo IV, 847-856)』、『ベネディクトゥス三世 (Benedictus III, 856-888)』、『ニコラウス一世 (Nicolaus I, 858-877)』、『ハドリアヌス二世 (Hadrianus II, 877-878)』、『ヨハネス八世 (Johannes VIII, 878-882)』、相次で位に即いたが、必ずしも常にロタールの選舉法が守られたわけではなかった。⁽¹⁴⁾ その間、フランク王國は、教皇グレゴリウス四世の時代に三分され、その後僅かな間、再び統一されたこともあったが、八八四年には終局的に崩壊し、東西フランクと上下ブルグンドと北イタリアとに分たれ、強力な王權が消失したため、教皇は、よう

やく俗権の支配から解放されたが、同時に又、強力な保護者を失ったため、群小俗権の餌食となった。北イタリアには、フリウリ公國 (Friuli, Friaul) とスポレート公國 (Spoleto) が擡頭し、前者のベレンガル (Berengar) 父子、後者のヴィドー (Wido) と、その子ランベルト (Lambert) が、北イタリアの王位と帝冠とを争い、これに又、ブルグンドの王や、ドイツ王アルヌルフ (Arnulf) も介入し、政權獲得のために教皇を利用せんとし、九世紀末には、教皇の暗殺や對立教皇の擁立が頻繁に行われたが、そのために、⁽¹⁵⁾教皇の權威地に墜ち、これに乗じて、ローマの有力量者テオフィラクトゥス (Theophylactus) 一家が恣に教皇を廢立し、⁽¹⁶⁾九世紀の八十年代、教皇マリヌス (Marinus I. 882-884) の時代から、十世紀の六十年代、ドイツのオットー一世 (Otto I.) の干渉を受ける時まで、約八十年間に、⁽¹⁸⁾二十四名も教皇が交替した。

(1) ラヴェンナ (Ravenna) とンニキオ (Commachio) とペンタポリス (Pentapolis アドリア海沿岸の五都市) とローマ周辺の地 (ducatus Romanus)。

(2) このごまめを「フランクの贈與約束」 (Pippinische Schenkungsversprechen) の原典は残っていない。

(3) Seppelt, S. 57; Feine, S. 211. 参照。

(4) Seppelt, S. 61; Hinschius I., S. 228. 参照。

(5) パウルス一世病篤き折柄、ネピ公 (Nepi) トト (Toto) 兵を率いてローマに來り、教皇の死を待って、自己の兄弟で平信徒に過ぎなかったコンスタンチヌスを、方式も踏まずに、教皇の位に即けた。十三ヶ月の後、ローマの聖堂參事會長クリストフォルス (Christophorus) はランゴバルド王デジデリウス (Desiderius) の力を藉りて、コンスタンチヌスの支配を倒すことができたが、クリストフォルスは、自己の知らぬ間に、修道士フィリップス (Philippus) が教皇

- に選ばれたのに憤慨し、直に、これを廢位し、自派の候補者、司祭ステファヌスを、古來の方式に従って、選舉して、教皇ステファヌス三世となしたのである。Seppelt, S. 61; Hinschius I., S. 228; Püchli I., S. 285. 参照。
- (6) コンスタンチヌス廢位後のローマ市内の動亂の鎮壓と新選舉法制定のために、教皇は、ビビンに、教會法に精通したフランクの司教たちの派遣を請うた。使節がフランクの宮廷に到着した時、既にビビンは世を去っていたが、その二子、カール (Karl) とカールマン (Karlmann) は、教皇の請を容れ、十三人のフランクの司教をローマに派遣したのである。Seppelt, S. 61. 参照。
- (7) *cardinalis* が、教皇の教會統治に參與する「樞機卿」となるのは、ようやく十一世紀中頃のことであるから、ここでは單に「カルディナル」としておく。
- (8) Mirbt, Nr. 231, S. 114—5. 尙、Feine, S. 281; Hinschius I., S. 239 f. 参照。
- (9) Seppelt, S. 62, 66, 68; Hinschius I., S. 229—231.
- (10) Seppelt, S. 56 f., 63 f.; Hinschius I., S. 231. 七十四年までは、教皇からバトリキウスと呼びかけられていたに過ぎず、自らかく稱したのではなかった。
- (11) Seppelt, S. 67; Neub., S. 76. 参照。
- (12) Mirbt, Nr. 244, *pactum Hindowici Pii cum Paschali pontifice*, S. 244 f. 尙、Seppelt, S. 68 f.; Hinschius I., S. 232; Feine, S. 211. 参照。
- (13) Seppelt, S. 69; Neub., S. 79. 参照。
- (14) ヴァレンチヌスはロータールの方式を守らないで彼階されたが、僅か數週間で死去し、グレゴリウス四世は、皇帝使節が選舉の手續を審査してから、敘階された。セルギウスは、選舉後直に敘階されたので、皇帝ロータールは、その子ルート

ヴィヒ二世をローマに派して、武力を以て、皇帝の権利を認めさせた。レオ四世の選挙の折は、ローマがサラセン人に包圍されていたので、皇帝の認證を求める暇なく、大急ぎで、彼階された。その死後、ロタールからイタリアの支配権を得たルートヴィヒ二世が、アナスタシウス (Anastasius) を教皇に立てようとしたので、ローマの聖職者は、急いで、ハネディクトゥス三世を選擧した。アドリアヌス二世の彼階はロタールの方式に従って行われた。Seppelt, S. 70—74; Hinschius I, S. 234 f

- (15) 詳しうは Ficker u. Hermelink. Das Mittelalter, S. 56; Seppelt, S. 84 f.; Neug, S. 108; Plochl I, S. 285 f. 等参照。

- (16) テオフィラクトゥスは、*vestearius* (ローマ聖堂出納官) *magister militum* (ローマ軍團長) *dux et consul et senator Romanorum* 等の肩書を有し、聖俗兩界にわたって絶大な勢力を有した。その勢力を笠に着て、妻テオドラ (Theodora) と二人の娘、マロチア (Marozia) とテオドラ (Theodora) とが、政治に容喙し、氣に入りの者を勝手に教皇の位に即けた。アナスタシウス三世 (911—913)、ランド (913—914)、ヨハネス十世 (914—928)、レオ六世 (928)、ステファヌス七世 (928—931)、ヨハネス十一世 (931—935) などは皆、テオフィラクトゥス家によって擁立された教皇であった。中でも、ヨハネス十一世の如きは、マロチアとセルギウス三世 (904—911) との間に生れた子であった。セルギウスの前のレオ五世 (903) やウリストフォルス (903—904) は、いずれも在位僅かで投獄され殺された。Seppelt, S. 85; Hinschius I, S. 239, 参照。

- (17) マリヌスはカエレ (Caere) の司教であった。ローマのカルディナル司祭か助祭に限るといふ候補者の制限 (七六九年の選挙法、前段二二頁参照) が遂に破られて、ローマ以外の聖堂の司教が選挙されたわけである。

- (18) Seppelt, S. 83,
中世における教皇と司教の選挙

十世紀後半、いわゆるオットーネン時代のドイツの王たちは、ローマにおいて、曾てのローマ皇帝やフランクの王を凌ぐ勢力をもち、ために古來の選舉方式は全く形式化し、教皇候補者は、殆ど常に、ドイツ王たる皇帝によって定められた。皇帝の意思が、事實上も法律上も、決定力をもっていたのである⁽¹⁾。これに對して、オットー一世 (Otto I. *der Große*) の死後、早くも反皇帝派がローマで勢力を伸そうとしたが、皇帝の力よくこれを抑えて、反皇帝派の立てた教皇は排除され、結局皇帝派の候補者が位に即くのが常であった。しかるに、十一世紀になると、ローマにおける皇帝の勢力衰え、代つてローマの貴族が支配權を握り、十一世紀前半、教皇は全くローマの貴族の傀儡と化した⁽²⁾が、その間に、皇帝の勢力再び伸び、皇帝は、ドイツ人を相次で教皇の位に即けた。

十世紀初め頃から次第に勢力を南に伸ばしてきた北イタリアのロンバルディア王が愈々ローマに迫らんとしたので、教皇ヨハネス十二世 (Johannes XII, 955-964) 救をオットー一世に求む。オットー軍を率いて北イタリアを席卷し、九六二年二月十二日、ローマにおいて帝冠を受く。翌十三日、教皇との間に締結された「オットーの協約」(Pactum Ottonianum) は、ピピンやカールの贈與約束の確認であると同時に、八二四年のロタールの「ローマ勅令」(constitutio Romana) の更新であつた。蓋し、皇帝使節の前で、皇帝への忠誠を誓約した後でなければ、敍階式を擧げてはならぬと規定しているからである。勿論これには教皇側は不満であつたから、その翌日、オットーがローマを去るや否や、教皇は祕かにロンバルディア王や東ローマ皇帝に款を通じた。オットーこれを聞いて、九六三年末ローマに引返し、公會議を開かせて、ヨハネスを廢位し、一平信徒を聖職者と市民をして選舉させ、幾段階かの敍階を一日ですまして、教皇レオ八世 (Leo VIII, 953-963) とした。その際、皇帝はローマ市民に、皇帝父子の同意なしには選

擧を行わないことを誓約させた。⁽²⁾ところが、オットー去るや否や、レオは追われ、ヨハネス十二世が迎えられて、再び位に即いたが、急死したので、ローマの聖職者と市民は、ベネディクトゥス五世 (Benedictus V, 964-966) を選挙した。オットー、契約違反を怒って、レオ八世をローマに連れ戻して、再び位に即け、ベネディクトゥスを廢位したが、レオもまた間もなく病死した。その後、ローマ市民は、もはや皇帝に反抗せず、皇帝の意思をうかがって、ヨハネス十三世 (Johannes XIII, 972-974) を全會一致で選挙したが、數ヶ月後に、貴族黨に捕われた。⁽³⁾

九七三年、オットー一世の指名で、ベネディクトゥス六世 (Benedictus VI, 973-974) が位に即いたが、その年のうちにオットー死し、ローマにおける皇帝派の勢力頓に衰えたのに乗じて、ローマの貴族黨のリーダー格であったクレセンチウス (Crescentius) は、ベネディクトゥスを廢位して、對立教皇ボニファチウスを立てたが、數週間で皇帝派に追放され、トゥスкулム伯家 (Tusculum) の出であるストリ (Sutri) の司教が選挙されてベネディクトゥス七世 (Benedictus VII, 974-983) となった。⁽⁴⁾

次に、ヨハネス十四世 (Johannes XIV, 983-984) がオットー二世 (Otto II, 973-983) の指名で選挙されたが、即位後間もなくオットー死してパトロンを失ったのに乗じて、クレセンチウス派は、さきに追放されたボニファチウスを呼び戻して、改めて位に即け、ボニファチウス七世 (Bonifatius VII, 984-986) となした。新教皇は、ヨハネス十四世を投獄したが、一年もたたぬ間に、自らもまた同じ運命をたどって、ヨハネス十五世 (Johannes XV, 985-996) 位に即く。⁽⁴⁾この教皇の死後、その後繼者として、オットー三世 (Otto III, 983-1002) 自己の従兄弟の子で二十四歳の青年ブルーノ (Bruno) を推し、全會一致で選挙されて、グレゴリウス五世 (Gregorius V, 996-999) となる。ドイ

ツ人で教皇となつた最初の人である。ところが、オットー三世イタリアを去るや否や、九九七年、クレセンチウス派が暴動を起させて、ローマの支配權を握り、東ローマの支持のもとに、ギリシヤ人を對立教皇として立て、ヨハネス十六世 (Johannes XVI, 997-1003) としたが、翌春、オットー三世ローマに來り、これを捕えて修道院に入れ、クレセンチウスの首をはねた。しかしグレゴリウス五世もまた、間もなく病死したので、オットーは、その師ラヴェンナの司教ジェルベール (Gerbert d'Aurillac) を推して、シルヴェステル二世 (Silvester II, 999-1003) とした。最初のドイツ人教皇に次ぐ最初のフランス人教皇である。⁽⁶⁾

十一世紀劈頭、オットー三世と教皇シルヴェステル二世が相次で世を去り、新にドイツの王位を繼いだハインリヒ二世 (Heinrich II, 1002-1024) がイタリアから手を引いたのを機會に、反皇帝派は忽ち勢力を伸ばし、中でも、ローマの保護者 (patricius Romanus) と稱してローマの支配權を握つていたクレセンチウス家のヨハネス⁽⁷⁾ (Johannes) は、自派のヨハネス十七世 (Johannes XVII, 1003) 及びヨハネス十八世 (Johannes XVIII, 1003-1009) 及びセルギウス四世 (Sergius IV, 1003-1012) を相次で位に即けたが、その死後、ローマの實權は、ハインリヒ二世やコンラート二世 (Konrad II, 1024-1039) と親交のあつた皇帝派のトゥスクルム伯 (Tusculum) の手に移り、その後約三十年間、教皇は常にその一族から選ばれ、ベネディクトゥス八世⁽⁹⁾ (Benedictus VIII, 1024-1033) 及びヨハネス十九世⁽¹⁰⁾ (Johannes XIX, 1024-1033) 及びベネディクトゥス九世⁽¹¹⁾ (Benedictus IX, 1033-1044) と號したが、全く同家の傀儡に過ぎなかつた。しかし、長年にわたるトゥスクルム家の横暴と、ベネディクトゥス九世の亂行に對する市民の反感から、再びクレセンチウス家が勢力をもり返し、一〇四四年にベネディクトゥスを追放し、クレセンチウス家の所領サピナ

(Sabina)の司教ヨハネスを擁立して、シルヴェステル三世(Silvester III, 1044-1046)となしたが、二ヶ月後、ベネディクトゥスはトゥスクルム家の力で復位し、シルヴェステルを破門した。しかし、その後も叛亂相次で起り、地位の安固ならざるをさどったベネディクトゥスは、一〇四五年、巨額の代償をとって自己の洗禮代父グラチアヌス(Gratianus)に位を譲って、グレゴリウス六世(Gregorius VI, 1045-1046)となした⁽¹³⁾。ところが、ベネディクトゥス九世は、讓位したにもかかわらず、尙も教皇として振舞っていたので、ローマの聖職者の請に應じて、ドイツ王ハインリヒ三世(Henrich III, 1039-1056)は、一〇四六年十二月二十日に、ローマ近くのストリ(Sutri)に公會議を開かせ、先ずシルヴェステル三世の廢位を宣言し、グレゴリウス六世に退位を強要してから、引きつづくローマの公會議で、ベネディクトゥス九世の廢位を改めて宣言した。並び立つ三人の教皇を除いた後で、ハインリヒは、バンベルグ(Bamberg)の司教スイトガー(Suigger)を教皇に指名し、聖職者と市民が歡呼の聲をあげている間に、これに位に即けて、クレメンズ二世(Clemens II, 1046-1047)となした⁽¹⁴⁾。この時ハインリヒが「ローマの保護者」(patricius Romanus)の稱號を贈られたといふことは、久しくローマの貴族が、この稱號のもとに行使していた教皇決定權を、ハインリヒが既に、ストリやローマの公會議で、三教皇を廢したり新教皇を指名したりして、事實上握っていたことを、改めて教皇が確認したに過ぎないが、この決定權によって、ハインリヒは、ドイツ人教皇クレメンズに引續き、尙三人もドイツ人を次次に教皇の位に即けて、ダマス二世(Damasus II, 1048)、『レオ九世(Leo IX, 1049-1054)』、『ヴィクトル二世(Victor II, 1055-1057)』となしたが⁽¹⁵⁾、その際、ハインリヒは豫めドイツの諸侯や司教たちと相談し、恰もドイツの内政を處理するような態度をとった。

- (1) Hinschius I., S.239 f.; Feine, S. 281.
- (2) Hinschius I., S. 239; Neub, S. 112.
- (3) Hinschius I., S. 239; Seppelt, S. 90.
- (4) Seppelt, S. 91; Cambridge medieval history, (以下 Cambridge と略記す) III, p. 168. ヌネヂィクトゥス七世はストリ (Sutri) の司教、前のヨハネス十三世はナルニ (Narni) の司教、次のヨハネス十四世はパウリア (Pavia) の司教であった。この時代には、地方の司教座から教皇座への轉任 (translatio) が盛に行われている。轉任は教會法違反だといふ考はオートローネン時代には全く忘れられてしまった。Hinschius I., S. 244 f. 参照。
- (5) Seppelt, S. 91; Neub, S. 113 f. (6) Seppelt, S. 92; Neub, S. 114
- (7) ヨハネスは、^{カトリック}カトリック三世にまつて首をはねられたウランテヌスの子。Seppelt, S. 94; Neub, S. 114.
- (8) Seppelt, S. 94; Neub, S. 114.
- (9) 初めクレゼンチウス派がグレゴリウスを教皇に立てようとしたが、ハインリヒ二世は、これを排して、トゥスクルム伯の一族ベネディクトゥスを位に即けたのである。Seppelt, S. 94
- (10) ヨハネスは前教皇の弟で、平信徒に過ぎなかつた。そこで、教會法の規定を犯して、選舉當日、一日のうちに各段階の段階を終了した。Seppelt, S. 95.
- (11) ベネディクトゥスは前教皇の甥で、當時まだ十二歳の少年であつた。その父でトゥスクルム一族の長であつたアルベリクスは、ベテロ聖堂に莫大な金額を寄進し、寶物を奉納して、聖職者の甘心を買い、息子の選舉を強行した。Seppelt, S. 95; Hinschius I., S. 245.
- (12) ベネディクトゥスは一度、市民から追放され、コンラート二世の力で復位したが、依然として素行修まらず、トゥスク

ルム家に對する反感もつゝ再び追放されたのである。Seppelt, S. 96.

(13) Seppelt, S. 94—96; Hinschius I., S. 245.

(14) Seppelt, S. 96 f.; Hinschius I., S. 245; Neuh, S. 116.

(15) クレメンズ二世在位十ヶ月で死するや、ハネディクトゥス九世、復位の機会をねらつて、八ヶ月もローマで頑張つてゐたが、ハインリヒはドイツのブリクセン (Brixen) の司教ホポ (Papo) を連れて来て、位に即けてダマヌス二世となした。ところが、僅か數週間で死去したので、ローマ側は、リヨンの大司教アリナル (Halinard) の指名をドイツ宮廷に請うたが、アリナルが固辭して受けなかつたので、一〇四八年十二月、ヴォルムス (Worms) の國會で、皇帝の従兄弟トゥール (Toul) の司教ブルーノ (Bruno) を選定し、教皇レオ九世となした。その死後、ハインリヒはアイヒンシュテット (Eichstätt) の司教ゲーブハルト (Gebhard) を指名して、ヴィクトル二世となしたのである。Seppelt, S. 97, 100. 参照。

(16) Hinschius I., S. 247.

一〇五六年、ハインリヒ三世死し、王妃アグネス (Agnes) の攝政のもとに位に即いたハインリヒ四世 (Heinrich IV, 1056—1106) の幼少微力なのに乗じて、教權ようやく回復し始む。加うるに、既に一〇五四年には、コンスタンチノポリスのギリシャ化した東方教會とも終局的に關係を斷ち、ローマ教會の獨立意識は次第に昂まりつつあつた折柄故、ハインリヒ三世につづいて一〇五七年に死去したヴィクトル二世の後繼者ステファヌス九世 (Stephanus IX, 1057—1058) は、初めてドイツの王やローマの貴族の干渉なしに、古來の教會法的方式に従つて、ローマの聖職者と平信徒によつて選舉された。ところが僅か一年で死去したので、この機會に教皇決定權を手に入れようとしたトゥスク

中世における教皇と司教の選舉

ルム家に率いられるローマの貴族黨は、ヴェレトリ (Velletri) の司教樞機卿ヨハネス (Johannes) を武力を以て擁立して、教皇ベネディクトゥス十世 (Benedictus X, 1058-1059) とした。ドイツとの親交を保ちつゝ教會の革新を行わんとしていた樞機卿ペテロ・ダミアニ (Petrus Damiani) をリーダーとする革新派は、これに抗議をなしたが、貴族黨の壓力におされて、フィレンツェ (Firenze) に逃れ、ドイツ王室の意向も確めた上で、フィレンツェの司教ゲルハルド (Gerhard) を候補者となし、フィレンツェの南方シエナ (Siena) に樞機卿たちを召集して、ゲルハルドの選挙を行い、これをニコラウス二世 (Nicolaus II, 1059-1061) とし、一〇五九年一月、ローマにおいて盛大に着座式を行つた。⁽²⁾ニコラウスの選挙は、従來の慣例を破り、ローマの聖職者や平信徒の参加なしに、司教樞機卿 (cardinales episcopi) のみによつて行われたのであるが、⁽³⁾ベネディクトゥスに對して、ニコラウスの正統性を主張しようとするためには、いきおい、ニコラウスの選挙に際して現實に行われた方式を、法律的に適正化しなければならなかつた。

これが第一の目的であるが、旁々俗權の干渉と、そのために起る紛争とを、今後絶対に回避するためには、選挙權者の範圍を確定し、選挙の手續を定める必要を感したニコラウス二世は、即位後間もなく一〇五九年の復活祭に、ローマに、一―三名にのぼる多教の司教を集めて公會を開き、「イン・ノミネ・ドミニ」(In nomine Domini) の名を以て知られる有名な教皇選挙法を布告し、左のように定めた。

今後、教皇の選定については「先ず以て、司教樞機卿たちが慎重に審議して (in primis cardinales episcopi diligentissima simul consideratione tractantes)」候補者一人を定めてから「次に、(他の) 樞機卿聖職者たちをして、

これに同意させる (mox sibi clericos cardinales adhibeat)」。こうして確定した「この選舉に殘餘の聖職者と平信徒は賛成すべきこと (reliquus clericus et populus ad consensum novae electionis accedant)」と規定された⁽⁴⁾。すなわち、先ず、昔行われていたように、そして又、ニコラウスの選舉の時のように、ローマ市周辺の七司教區の七名の司教樞機卿 (Cardinales episcopi) が集つて、十分相談し、意見がまとまったところで、全會一致で一人の候補者を定める。しかる後、司教樞機卿や助祭樞機卿に、これを提示して、同意を求める。同意があれば全會一致で選舉が成立したことになる。かくして、ローマの一般聖職者や平信徒は、單に選舉の結果に對して、事後的に歡呼の聲をあげて賛成の意思表示をなすに過ぎないものとなつた。従つて、從來しばしばあつたような、貴族や勢力家が、ローマの聖職者や平信徒に壓力を加えたり、これらを煽動したりして、教皇選舉を左右することが最早でなくなつたが、從來しばしば——特に最近にはハインリヒ三世によつて——行使された王の干涉權については、いわゆる國王條項 (Königsparagraph) に、これは教皇から恩惠的に與えられたものに過ぎない、と記して、暗に國王の干涉を排除してゐる。

その他、ニコラウスの選舉を合法化するために、新に設けられた規定が若干あるが、要するに⁽⁶⁾、この選舉法の主眼とするところは、教皇選舉の主要選舉人を司教樞機卿に限定したことにある。この選舉法について、同年ヨーロッパ各國の司教たちに通達した教皇回勅 (liternae encyclicae) にもつて、教皇は「ローマ教皇の選舉 (electio Romani pontificis) が司教樞機卿たちの權限に存するに⁽⁷⁾ (ut…… in potestate cardinalium episcoporum sit) は神の照覽の下に定められたものである (primo namque inspectore Deo est statutum)」旨を強調してゐるし、同年公布

された「聖職賣買禁止令」(decretum contra simoniacos)⁽⁸⁾ においてもまた、「司教樞機卿たちの (cardinalium episcoporum) 教會法に従った全會一致の選舉によらざして (sine concordia et canonica electione) 使徒座 (すなわち教皇の位) に即した者 (quis . . . fuerit apostolice sedi inthronizatus) は教皇とは看做されず、むしろ背教者と看做せらるべし (non papa vel apostolicus, sed apostaticus habentur)」と、強い警告を與えて、主要選舉權者を司教樞機卿に限定する旨を、繰返し繰返し強調し、その全會一致を教皇選舉の要件と定めている。

ニコラウス二世の教皇選舉法は、しかし、布告後三十年間、規定通り行われたことは稀であった。教皇選舉から繰出されたローマの貴族やドイツ皇帝が満足する筈がなかったからである。ドイツの司教たちは、既にニコラウス在世中の一〇六一年初めの公會議で、この選舉法の無効を宣言した⁽⁹⁾。それ故、一〇六一年七月ニコラウスが急死するや、後繼者の選舉が紛糾したのは當然のことであった。教皇選舉法に不満なローマの貴族たちは「ローマの保護者」の印璽をもたせて、使節團をドイツに急派し、ローマの保護者たる資格において、ドイツ王が教皇候補者を指名することを懇請した。教會の革新に反對して皇帝側に立っていた北イタリアのロンバルディアの司教たちもまた、同じ要請をなした。かかる動きを見て、ヒルデブランド (Hildebrand) をリーダーとする教會革新派は、急遽九月三十日に、司教樞機卿の全部と、その他の聖職者を集め、教皇選舉法の規定を嚴守し、「司教樞機卿の全會一致で (cardinales episcopi unanimiter) ルッカ (Lucca) の司教アンセルムス (Anselmus) を選舉し、他の聖職者たちも、これに賛同し、直に十月一日に、敘階をすませて、アレキサンデル二世 (Alexander II, 1071-1073) とした⁽¹⁰⁾。これに對して皇帝派は、同年十月二十八日、スイスのバーゼル (Basel) に集り、ロンバルディアの司教たちの提案に基き、バルマ

(Parna) の司教カダルス (Cadalus) を選舉して、ホノリウス二世 (Honorius II, 1061—1074) とした。この會議には、ロンバルディアの司教たちの他には、ローマの貴族の一部と、ローマの某修道院長が唯一人参加したに過ぎず、司教樞機卿は一人も参加しなかったから、教皇選舉法の要件を充たさず、カダルスの選舉は當然無効と看做さるべきものであった。⁽¹¹⁾ それ故にこそ、カダルスが、要件の不備にもかかわらず自己を主張せんとせば、いきおい武力を以てするより他なかったのであり、遂に一〇六四年のマントゥア (Mantua) の公會議で、イタリアの司教もドイツの司教も一致して、ホノリウスを廢位して、アレキサンデルを正統の教皇として承認せざるを得なかつたわけである。⁽¹²⁾

(1) 選舉後直に彼階が行われ、ようやく數ヶ月後に、念のために選舉の認證をアグネスに求めている。尙 Sappelt, S. 100; Neub, S. 138. 參照。

(2) Sappelt, S. 101; Neub, S. 139. (c) Feine, S. 236

(4) Mirbt, Nr. 270, S. 141.

(5) 極めて漠然と記されたこの條項の解釋については争がある。その要點については Feine, S. 236 Anm. 10. を見よ。

(6) ローマで選舉を行うことが困難である場合には、ローマの聖職者を招いて、ローマ以外で選舉を行うことを許すと規定したり、ローマの聖職者でない者を教皇に選ぶことを許すと規定したりしているが、これは、フィレンツェの司教であったニコラウスがシエナで選舉されたことを合法化するためであった。尙 Neub, S. 140. 參照。

(7) Mirbt, Nr. 271, S. 142. (e) Hirschius I., S. 254 Anm. 3. 參照。

(9) Hirschius I., S. 256; Ficker, S. 79. 參照。

(10) アンセルムスは、曾てハインリヒ三世の宮廷に嚮在し、王から司教座を授與されたこともあり、ドイツ宮廷に受けがよ

中世における教皇と司教の選舉

いことを計算に入れての選定であったが、それでも尙、皇帝派による選舉妨害を警戒して、南伊ノルマンの武裝兵の警護のもとに選舉が行われた。尙 Seppelt, S. 103; Neub, S. 141; Hinschius I, S. 256 f.; Pöchl II, S. 77; Cambridge V, d. 43. など参照。

(11) Hinschius I, S. 257; Pöchl II, S. 77.

(12) Hinschius I, S. 257; Seppelt, S. 104; Cambridge V, p. 42.

一〇七三年アレキサンデルの死は、又もや教會革新派と皇帝派との間を異常に緊張させた。かねて革新派の間でアレキサンデルの後繼者として期待されていた樞機卿ヒルデブランドが委員長となつて、葬儀が進行中、突然「ヒルデブランドを教皇座に即けよ」と叫ぶ聲が起るとともに、民衆は忽ち暴徒化し、ヒルデブランドを、その制止もきかずに、擔ぎあげ、サン・ピエトロ聖堂 (San Pietro) で華々しく着座式を行つて、グレゴリウス七世 (Gregorius VII, 1073-1085) と宣言した。一〇五九年の教皇選舉法は完全に無視されたわけである。⁽¹⁾

かくして教皇となつたグレゴリウスは、教會革新の第一着手として、一〇七五年の四旬節公會議で、平信徒による聖職叙任 (investitura) の禁止を宣言し、同年十二月これをハインリヒ四世に伝え、破門と廢位とを以て脅した。王は、翌一〇七六年一月、ヴォルムスにドイツの司教たちを集め「選舉法の規定に従わないで位に即いたグレゴリウスは教皇として命令する資格なし」として、破門の豫告を一蹴し、司教たちは、教皇への忠誠拒否を決定し、直に、この旨をローマに書き送つた。この傲慢な答に怒つた教皇は、同年二月、四旬節公會議で、ハインリヒの破門を宣言し、ドイツ諸侯のハインリヒに對する忠誠義務を解除した。ここにおいてか反皇帝派の諸侯は、同年十月、トリブー

ル (Tribur) に會し、「もし來年 (一〇七七年) の聖マリアの御潔めの祝日 (二月二日) までに破門が解かれなかった場合には、王は退位すべし」と決議した。その日の將に迫らんとする一月二十五日から三日間、カノッサ (Canossa) の屈辱を忍んだ後、ハインリヒはようやく破門を解かれたが、あくまで王の退位を望んでいた諸侯は、同年三月、フォルヒハイム (Forchheim) で、ハインリヒの義兄弟ルードルフ (Rudolf von Schwaben) を對立王として擁立した。そこで兩者の戦となったが、ハインリヒ側の旗色がよくなりかけた一〇八〇年に、ハインリヒは、ルードルフの破門を教皇に要求し、應じない場合には、對立教皇を立てる、と云って教皇を脅かした。これに對する答として、教皇は、再びハインリヒを破門し、ルードルフをドイツ王として承認した。しかし今度は、ドイツ司教の大多數がハインリヒ側に立ったから、王は、同年六月ブリクセン (Brixen) の公會議で、三十名にのぼるドイツと北イタリアの司教たちをして、全會一致で、グレゴリウス七世の廢位と破門を宣言させることができたのである。この會議で、後繼者として、ロンバルディアの司教たちのリーダー格であったラヴェンナ (Ravenna) の大司教ヴィベルトゥス (Wilbertus, Guibertus) が選舉されて、クレメンヌ三世 (Clemens III, 1080-1100) と稱したが、この選舉には、北イタリアやドイツの司教や諸侯の他には、司祭樞機卿が一人出席しただけで、司教樞機卿は一人も出席しなかったから、一〇五九年の選舉法の要件を充さなかった。それ故に、ヴィベルトゥスは、自己の選舉を合法化するために、一〇五九年の教皇選舉法のテキスト中、司教樞機卿 (cardinales episcopi) とあるべき箇所を改竄し、司教 (episcopi) という文字を削除して、單に樞機卿 (cardinales) となし、暗に司祭樞機卿をも主要選舉人に含ませたといわれるが、この頃次第に、司祭樞機卿の地位が上り始めていたことも確からしく、そのために、こうした改竄が大した無理なし

に行われたものらしい。

- (1) Hinschius I, S. 257 f.; Seppelt, S. 105; Neub, S. 142; Cambridge V., p. 51.
 (2) Hinschius I, S. 258; Seppelt, S. 107—9; Neub, S. 148—151; Cambridge V., p. 75.
 (3) それ故に、今日傳つてゐるニコラウス二世の教皇選舉法のテキストの中には、選舉人を漠然と *cardinales* と記してゐるものがあつて、Hinschius I, S. 259; Cambridge V., p. 37; Mirbt, S. 141 Ann. 2. 参照。

ここで樞機卿について一言する必要がある。樞機卿の原語「カルディナリス」(*cardinalis*)には「樞機」というような意味はない。いろいろ説はあるが、今日では一般に、「蝶番」という意味の「カルド」(*cardo*)という言葉から來たものと考えられている⁽¹⁾。八世紀頃から、特定の聖職者に對して、カルディナルという附加語がつけられるようになり、ローマ市周邊の七司教區の七司教を「カルディナル司教」(*cardinales episcopi*)といひ、ローマ市内の特定の二十五聖堂、いわゆる「名義聖堂」(*titulus, Titelkirche*)で司牧の職をつとめる司祭を「カルディナル司祭」(*cardinales presbyteri*)というようになつた⁽²⁾。カルディナル司教の數は、その後増減がなかつたが、カルディナル司祭の數は、十一世紀中頃には、二十八名となつた。「カルディナル助祭」(*cardinales diacones*)の起元は明らかでないが、十一世紀には、ローマ市の十八司牧區の長である十八名の助祭を指すようになった。従つて、十一世紀當時カルディナルの稱號をもつた高位聖職者は、司教七名(後に六名となる)、司祭二十八名、助祭十八名、合計五十三名であつた⁽³⁾。これらのうち、カルディナル司教が、十一世紀の中頃レオ九世(Leo IX, 1059—1064)の時代から、教皇の顧問として、教會統治の樞機に參與するようになったから、この頃以後はカルディナルを「樞機卿」と呼ぶのが適

當であろうが、教會統治の面で活躍し始めた司教樞機卿が、選舉の面でも、一〇五九年以來、主要選舉人となったのは、蓋し當然の成行であつたろう。その後數十年間、専ら司教樞機卿が主要な役割を演じたが、グレゴリウス七世(1073-1085)の時代から、カルディナル司祭の地位も上つてきた。⁽⁶⁾それ故に、ヴィルベルトゥスも、一〇八〇年の選舉のあとで、ニコラウス二世の選舉法のテキストを改竄して、主要選舉人を單に「樞機卿」(cardinales)となして、カルディナル司祭(cardinales presbyteri)をも暗に、その中に含ませて、司祭だけしか参加しなかつた自己の選舉が幾分でも法に通過していたかのような體裁を繕うことができたのであるが、この改竄は、その後そのまま踏襲されて、當時公にされた數々の法令集⁽⁷⁾が、ステファヌス三世の七六九年の選舉法を収録するに當り、ニコラウスの選舉法の改竄したものを普及させたのである。⁽⁸⁾しかも、それが大して怪しまれなかつたといふことは、當時既に、カルディナル司祭も、樞機卿の中に加えられていたことを證するものであろう。最後に、カルディナル助祭も、樞機卿に加つて、十二世紀初めパスカリス二世(Paschalis II, 1099-1118)の時代に「樞機卿會」(collegium cardinalium)が成立するのである。

(1) 禮拜の際に、教皇を補佐する高位聖職者が、祭壇(alta)の四隅(cardo 東西南北の方位、すなわち四方)に侍立したところから、これらの聖職者を standes ad cardines altaris (祭壇の四方に立つ者)といつたところから cardinales という言葉が來たとす説や、「議長を」ともめ」といふ意味の cardinalare という動詞から來た、という説はいずれも後代の説明に過ぎない。cardinales を principes (首長の)と同義であるとなすのも假説である。今日では一般に、ドアの蝶番を意味する cardo という言葉から來たものとされている。カルドーがドアを建物に連結するよ

うに、聖職者を聖堂に結びつけることを意味し、五世紀の末、ゲラシウス一世 (Gelasius I, 492-6) の時代には、*episcopus visitator* (巡迴司教) と *episcopus cardinalis* (特定聖堂に常勤の司教) との區別がなされたが、こうした意味でのカルディナリスという附加語が、やがて、特定の司祭や助祭にも用いられるようになったのである。Pöchl I, S. 290 ff. 参照。

(2) もとは、信徒の集會や禮拜用に、聖堂代りに用いられていた個人の家であった。初めは個人から借りていたが、後に奇贈を受けて聖堂となった。しかし依然として、もとの家主の名を記した表札 (*titulus*) が入口に掲げられていたので名義聖堂 (*titulus*) とするのである。Feine, S. 43. 参照。

(3) 前に述べたステファヌヌス三世の七六九年の選舉法に初めてカルディナルなる附加語つきの司祭や助祭のことが出ている。

(4) Feine, S. 278 Anm. 5. に詳しくカルディナル助祭の沿革が述べられている。

(5) Feine, S. 277 ff.: Cambridge V, Introduction VIII.

(6) Feine, S. 279, 281, Pöchl II, S. 83.

(7) ルッカの司教アンセルムス (Anselmus, 71-108) の法令集 *Collectio canonum*, 樞機卿マウステイトヌス (Deusdeditus) の法令集 (一〇八七年頃)、『これの數年後に出たストリの司教ボニツキ (Bonizo) の *Liber de vita christiana*』一〇四年から一〇一三年までの頃の樞機卿グレゴリウス (Gregorius) の *Polycarpus* など。Feine, S. 146, 281. 参照。

(8) Feine, S. 281.

グレゴリウス七世亡命先の南伊で客死し、空位一年の後、一〇八六年に、ヴィクトル三世 (Victor III, 1086-1087)

が教皇に選ばれたが、この選挙には、司教その他の樞機卿のほか、昔のように一般聖職者や平信徒も参加した。ヴィクトルの死後、またもや後継者の決定にひまどり、半歳の空位の後、オステリア (Ostia) の司教樞機卿オットー (Otto) と、フランス人が、樞機卿の全會一致で選ばれて、ウルバヌス二世 (Urbanus II, 1088-1099) となった。その死後、司教樞機卿ライネリウス (Rainierius) が、樞機卿の全部と一般聖職者と平信徒とによって選挙されて、パスカリス二世 (Paschalis II, 1099-1118) と稱したが、¹⁾ 一〇八八年に擁立された對立教皇クレメンヌ三世 (1060-1100) が頑張っており、その死後も、その派の司教たちによって、テオドリクス (Theodoricus, 1100-1102) アルベルトウス (Arbertus, 1102-1105) シルヴェステル四世 (Sylvester IV, 1105-1111) が相次いで對立教皇として擁立されたので、パスカリスはローマに入ることを得ず、遂に南伊で客死し、一一一八年、助祭樞機卿ヨハネス (Johannes) が、樞機卿全部と一般聖職者と平信徒とによって選挙されて、ゲラシウス二世 (Gelasius II, 1118-1119) となったが、ローマには、皇帝派の貴族フランデパニ (Frangipani) 一派が頑張っており、その上、皇帝ハインリヒ五世 (Heinrich V, 1106-1125) がローマに乗り込み、グレゴリウス八世 (Gregorius VIII, 1118-1121) を對立教皇として立てたため、遂にゲラシウスはローマに入ることを得ず、南フランスに逃れて、翌一一一九年一月、クリュニー (Cluny) 修道院で客死した。²⁾ この時ゲラシウスに隨行して、クリュニーにいた樞機卿たちは、翌二月に、そこに居合わせた聖職者や平信徒とともに、ヴィエンヌ (Vienne) の大司教ギドー (Guido) を選挙して、カリストゥス二世 (Calixtus II, 1119-1124) としたが、この選挙は、ローマに居残っていた樞機卿たちや一般聖職者によっても、直に事後的承認を得たので、全會一致と看做された。³⁾ カリストゥスは翌年イタリアに赴き、一一二一年、ローマにおいて大歓迎を受けて、既に皇

帝の支持を失っていた對立教皇グレゴリウス八世を捕えたが、ドイツにおいても、ハインリヒ五世が諸侯と和解し、教皇廳に對して親睦政策をとらんとしていたので、カリストゥスの地位はようやく安定した。その結果が、かの聖職敍權の争を解決した一一二二年のヴォルムスの協約(Wormser Konkordat)であるが、教皇選舉も、ようやくこの時、ドイツ皇帝の干渉から全く解放された。

しかし、聖職敍任權問題で、教皇と皇帝とが争っていた間に、ローマの貴族が又もや勢力を伸ばし、皇帝に代つて、教皇位を左右し始めた。當時ローマでは、ピエルレオニ家(Pierleoni)とフランヂパニ家(Frangipani)とが勢力を争っていたが、ヴォルムスの協約後間もなく、カリストゥス二世(一一二四年死)とハインリヒ五世(一一二五年死)とが相次で死んでから、教皇選舉をめぐつて、兩家の争は激化した。カリストゥスの後繼者の選舉では、ピエルレオニ家が樞機卿たちとともに推した候補者、司祭樞機卿テオバルドゥス(Theobaldus)が、フランヂパニ派の候補者、司教樞機卿ラムベルトゥス(Lambertus)に讓歩したため、幸いにして二重選舉を避けることができたが、かくして位に即いたホノリウス二世(Honorius II, 1124-1138)の後繼者については、遂に二重選舉となつてしまつた。一一三〇年二月、ホノリウスの病篤しと聞くや、後繼者として、フランヂパニ派は、樞機卿グレゴリウス(Gregorius)を、ピエルレオニ派は、ピエルレオニ家の長であり樞機卿であるペトルス(Petrus)を推さんとし、二重選舉になる恐れがあつたので、ホノリウスがいよいよ危篤に陥つた二月十三日の夜、兩派の樞機卿たちは相談の上、同僚八人、すなわち、司教二人、司祭三人、助祭三人を選んで調停員(compromissarii)となし、グレゴリウスを指名する了解のもとに、投票してみたたら、八人のうち三人は約に反してペトルスに投じた。尤も、樞機卿全體としては、ペトルスを推す

ビエルレオニ派の方が優勢で、二十名を越えていたのに反し、グレゴリウスを推すフランゼパニ派は十六名に過ぎなかった。その夜ホノリウスの病革まったので、翌朝、調停員のうち五人が集ってグレゴリウスを選挙し、その派の残りの樞機卿たちも票を投じ、グレゴリウスをラテラノ宮殿に伴って、着座式を行い、インノケンチウス二世 (Theocentius II, 1130-1143) とした。三時間ほどおかれて、ビエルレオニ派の樞機卿二十数名が集って、従来の方式に従って、ペトルスを選挙してアナクレトゥス二世 (Anacletus II, 1130-1138) とした。⁽⁶⁾ 得票数からいえば、アナクレトゥスの方が多いが、司教樞機卿七名の大部分がインノケンチウスに票じたから、この方が質において優っていると考えられた。しかし手續の點で、インノケンチウスの選挙が従来の方式に従わなかったのに反して、アナクレチウスの方式に揃っていた。だが時間的には遅れていた。そこで、いずれが果して正統の教皇であるか、甲論乙駁果てしなかったが、當時、教會法學者として全ヨーロッパに盛名隠れなかったフランスのクレルヴォー (Clermont) の司教ベルナル (Bernard) は「一層健全な部分」 (sanior pars)、すなわち權威ある優秀な人々の多數が選んだのであるから、インノケンチウスの方が正統である、といい、この意見がフランスを動かして、同年九月、エタンブ (Etampes) の公會識で、インノケンチウスを教皇として承認したが、ドイツでも、同年十月のヴルツブルグ (Wurzburg) の公會識で、インノケンチウスを承認し、王ロタル (Lothar) も、その決定に同意した。ベルナルの權威は、その他イギリス、スペイン及びイタリアの一部においても、インノケンチウスを教皇として認めさせた。しかし、ローマにおいては、ビエルレオニ家の財力が物をいって、初めのうちはアナクレトゥスを支持する者の方が多かったので、暫くインノケンチウスはベルナルのもとに身を寄せていたが、ようやく各國の支持を受けて、ローマに

歸ることができた。しかし、アナクレトウスは、一一三八年、その死にいたるまで、十八年間も抗争を續けていた。⁽²⁾

- (1) Seppelt, S. 111—115; Hinschius I., S. 258, 262 f.; Cambridge, V., p. 86, 87, 95, 96, 105; Neub, S. 152 f.
- (2) Hinschius I., S. 262; Cambridge, V., p. 105.
- (3) ビェルレオニ家は、ポロニヤ人で、ウルヌヌス二世に金を貸して、財政上の危機を救った功により、洗禮を受けて、キリスト教徒となることができたが、その次のビェルレオネ (Perleone) の代に、家名益々あがり、その子ペトルス (Petrus) は、一一一六年に樞機卿に任命された。一一三〇年の選挙の折、候補者に推されたのは、このペトルスである。Neub, S. 179 f. 参照。
- (4) Seppelt, S. 117; Hinschius I., S. 263; Neub, S. 179 f.
- (5) 後記(本稿七〇頁以下)述べる一一一五年の第四回ラテラン公会議で確認された選挙の三方式の中の「調停員による間接投票」(electio per compromissum)が、既に「ロム」で行われてゐる。
- (6) Hinschius I., S. 263, Cambridge, V., p. 368; Hauck, Kirchengeschichte Deutschlands IV., S. 136—138.
- (7) Seppelt, S. 118; Cambridge, V., p. 363—368; Neub, S. 180 f.

三

インノケンチウス二世の時代に、南伊にノルマン王國が出現し、次第に勢力を伸ばしつつあったが、北からは、ドイツのフリードリヒ一世 (Friedrich I. Barbarossa, 1152—1190) がイタリアに手を伸ばし、教皇に對敵保護を約した。ところが、一一五六年、ベネヴェンツァ (Benevent) で、教皇ハドリアヌス四世 (Hadrianus IV., 1154—1159) がノルマ

ン軍の重圍に陥った時、フリートリヒが約に反して助けなかったので、教皇は、遂にノルマンと和し、その要求を容れて、ノルマンの王位を認め、イタリア南部とシシリア島の領有を許さざるを得なかったが、教皇の背信行爲を怒ったフリートリヒは、一一五八年ロンカリア(Ronaglia)の國會で、イタリアの司教たちに、封臣としての誓をさせ、教皇領内にも、皇帝の支配を伸ばそうとした。このように南と北から強い壓力を加えられたため、樞機卿たちの對外政策は、いきおい分裂せざるを得なかった。司祭樞機卿オクタヴィアヌス(Octavianus)が率いる少數派は、親獨政策をとろうとしたが、司祭樞機卿ローランドゥス(Rolandus)をリーダーとする多數派は、ノルマン王國と結んで、教會の自由を確立しようとした。⁽¹⁾

この對立は、一一五八年九月一日、ハドリアヌスの死を機會に、後繼者の問題をめぐって激化せんとした。そこで、樞機卿たちは、選舉にさきだつて、「全會一致の選舉のみが有效である。票が分れた時には、いずれの候補者も、これを正式に選舉された者と看做さず⁽²⁾」と、豫め申合せて、二重選舉を回避しようとしたが、申合せにもかかわらず、票は候補者三名に分散した。かねてハドリアヌスは、中立派のポルトー(Porto)の司教ベルナルド(Bernardo)を後繼者として推していたが、これに票を投ずる者少く、約十名はオクタヴィアヌスに投じ、大多數はローランドゥスに投じた。そこで、十分話し合つてから投票をやり直すことになった。先ずベルナルド派を切り崩し、二三の者をローランドゥス側に引き入れたが、残りの者は、ローランドゥスとオクタヴィアヌスの二者擇一に迷っていた。結局大多數は、ローランドゥスを推すことになったが、尙七名は、あくまでもオクタヴィアヌスを支持したので、更に切り崩し工作が續けられ、遂にローランドゥスは全投票數二十七票中の二十三票を獲得した。⁽³⁾ 絶對多數とはいへ、全會一

致には未だ達しなかったが、折衝既に旬日に及んだので、ローランドゥス側は、一先ずこれを打切ることを提案し、結論としてローランドゥスの當選を主張した。しかし少數派は、どこまでも自派の敗北を認めず、教皇位のシンボルである聖衣 (pallium) を力づくで手に入れようとして、兩候補者が争っているところに、突如として、オクタヴィアヌスの手兵が闖入し、武力を以て聖衣を奪い、これをオクタヴィアヌスに着せかけて、教皇ヴィクトル四世 (Victor IV, 1158-1164) と宣言した。ローランドゥスは、やむを得ず、自派の者と共に一先ず難を避け、次で、ローマ郊外のニンファ (Nympha, Ninfia) で、九月二十日に、オステティア (Ostia) の司教から敍階を受けて、アレキサンデル三世 (Alexander III, 1159-1181) と稱した。しかし、オクタヴィアヌスもまた、永くはローマに留ることを得ず、ファルファ (Farfa) の修道院で、十月四日に敍階を受け、双方ローマ近郊の、互に相去ること數哩のところ、相對峙して譲らず、互に他をアナテマ (anathema) と呪詛し合うとともに、ヨーロッパ各國の王侯や司教に、檄を飛ばし、使者を派して、自己の當選を主張した。⁽⁴⁾

ヴィクトルの訴を聽いて、フリートリビは、審理のために、一一六〇年二月五日、パヴィア (Pavia) に公會議を召集した。しかし、來たり會する者の多くは修道院長や下位聖職者であつて、司教や大司教は僅かに五十名、しかも、その多くは皇帝の息のかかったドイツや北イタリアの司教であつた。この公會議を否認したアレキサンデルは勿論出席しなかつたから、益々以て、皇帝派のヴィクトルにとっては有利であつた。ヴィクトルを支持する者も、アレキサンデルの得票が絶對多數であつたことは認めたが、ヴィクトルの方が、先きに聖衣をまとい、着座式を行い、空位なしに教皇の位に即いた (titulo non vacante) 點を力説した。結局、召集に應ぜず審理を拒否したアレキサンデルは、

皇帝に楯突く者であるといつて弾劾され、これに反して、ヴィクトルは、早く聖衣をまとい教皇位に事實上早く即したことよつて、得票数の不足は相殺される、と辯護されて、ヴィクトルこそ正統の教皇であると宣言され、直にヴィクトルは、その資格において、アレキサンデルの廢位と破門を宣言した。これに對してアレキサンデルは、ヴィクトルとフリートリヒの破門を以て應酬し、兩者の對立と抗争、従つて教會の分裂 (schisma) は、その後實に十八年の長きに及んだ。その間、ヴィクトルを支持する皇帝側は、ヴィクトルの死後、パスカリス三世 (Paschalis III, 1099-1118)、カリストゥス三世 (Calixtus III, 1092-1119) を相次で擁立して、アレキサンデルと争つたが、一一七六年、教皇側と結んだ北イタリア諸都市の軍と戰つて、ドイツ軍が大敗するに及んで、遂に皇帝は教皇と和睦し、イタリアの地に、ようやく平和の春が訪れた。

かくして、今や皇帝側からも、正統の教皇と認められたアレキサンデル三世が、このような紛糾の再び起ることを防ぐために、教皇選舉の方式を明確に法文化し、旁々自己の選舉の合法化をはかったのは、蓋し當然の措置であつたろう。すなわち、一一七九年三月に、教皇は第三回ラテラノ公會議 (III. Laterano concilium) を召集し、審議の結果、教皇令「リケット・デ・ヴィタンダ」(Ricet de vitanda) を以て、次のように布告した。

「教皇の選立につき、樞機卿間に完全な一致が得られないで、しかも、一致した三分の二に、三分の一が同調することを欲しない場合には (si forte ..... inter cardinales de substituendo pontifice non poterit concordia plena esse, et duabus partibus concordantibus tertia pars noluerit concordare) 三分の二から選ばれた者は (ille ..... qui a duabus partibus fuerit electus et receptus) ローマ教皇と看做せらる (Romanus pontifex habeatur)。

三分の一から指名されたに過ぎない者 (quis autem de tertiae partis nominatione confusus) が、敢て教皇を僭稱したならば (si…… sibi nomen episcopi…… usurpaverit)、『その者』ならばに、『その派の者は、破門を受け、一切の位階を剝奪せらるべし』(tam ipse quam qui eum receperint, excommunicationi subiaceant et totius sacri ordinis privatione mulcentur)。⁽²⁾ 又、『三分の二以下の少数によって教皇に選ばれ、敢て辭退せざる場合にも、前記の刑罰が科せられる (praeterea si a paucioribus aliquis quam a duobus partibus fuerit electus ad apostolatus officium, … nullatenus assumatur et praedictae poenae subiaceat, si humiliter noluerit abstinere)』と。

教皇選舉は、昔から行われてきたように全會一致が望ましいが、今や事實上、全會一致は極めて困難となってきた。アレキサンデルの選舉に先だち「全會一致の選舉のみ有効である」と、選舉人である樞機卿たちが、あらためて全會一致の原則を確認し、この原則に従って、折衝談合が行われ、ようやく絶対多数にまでは漕ぎつけたが、遂に全會一致には到達し得なかった。そこで、二十七票中の僅か四票となった少数派を、何とかして多数派に同調させ、全會一致の選舉を成立させようと努力したが、少数派が、もはや同調を義務と感ぜず、頑として自説を固執したので、遂に二重選舉となったわけである。そこで、全會一致の原則一本槍の方針を改め、同調義務を課することも断念して、全會一致が得られず少数が同調することも欲しない場合には、やむを得ず、三分の二 (duae partes) の多数決を認めようというのである。かく定めることによって又、全會一致ではなかったが三分の二以上の票を集め得たアレキサンデルの選舉を合法化しようとするのであるが、樞機卿の三分の二と規定することによって、また、暗黙のうちに、ドイツ皇帝とローマの貴族の選舉への介入が完全に排除され、樞機卿だけが教皇選舉の有資格者であることが確認され

たのである。⁽⁷⁾ それと同時に、樞機卿が構成する樞機卿會 (collegium cardinalium) が法的統一體と考えられ、その統一的意思を形成するにつき、ここに初めて、「多數決原理」(Majoritätsprinzip) が認められるにいたつたのである。

司教や修道院長のような高位聖職者 (praelatus) の選挙については、たとえ二重選挙となっても、教皇なり首都大司教なりが、上位者 (superior) として、これを審査し、當選者を決定することができるから、この第三回ラテラノ公會議は、従来行われていた數量よりも質を重んずる「優秀決原理」(Sanioritäsprinzip)⁽⁸⁾ を確認し、「一層大にして且一層健全な部分の意見が重んぜらるることを要す (maioris et sanioris partis debet sententia prevalere)」⁽⁹⁾ となしたが、教皇の選挙について、これを認めるとなると、近くは一一三〇年のアナクレトゥス二世や、一一五九年のヴィクトル四世の選挙にその例を見る通り、自派の方が、一層健全で優秀である (sanior) と稱して、當選を主張し、二重選挙となり、相手方が承服しないと、實力を行使してまで、無理を通そうとしたり、その機に乗じて、ドイツ皇帝が二重選挙の審査権を主張して、干渉の手を伸ばす惧れがあるから、専ら數の多少だけで決定することとし、三分の一の (de tertiae partis) 少數は勿論のこと、三分の二未満の (a paucioribus quam a duabus partibus) 票を得た選挙をも無効と定めて、争の餘地をなくし、三分の二未満の票を得たに過ぎない者が、敢て當選を主張する場合には、これを嚴罰に處する旨を明らかにしたのである。

(1) Seppelt, S. 123; Neub, S. 186—8.

(2) 皇帝派の一樞機卿の次のような書簡に據る。曰く、convenuerunt episcopi, presbyteri, diaconi, cardinales…… et

promiserunt sibi invicem in verbo veritatis, quod ..... concorditer possimus convenire, bene; sin autem, nullus procedat sine communi consensu et hoc observetur sine fraude et malo ingenio. vgl. Hinschius I., S. 264 Anm. 4.

- (3) Hinschius I., S. 264, Cambridge, V., p. 194, 430; Hauck, IV., S. 241—243. 参照。數字の計算は、*同上*に據る。フンシウスのは稍々異なる。
- (4) Hinschius, I., S. 264; Cambridge, V., p. 431.
- (5) Hauck IV., S. 250—253; Cambridge V., p. 433, *Historians history of the world*, vol. 8, p. 606.
- (6) Mirbt, Nr. 316, S. 172. (7) Hinschius, I., S. 265
- (8) 町田、多數決と全會一致（一橋論叢、二三卷二號）、「一二九頁以下、町田、多數決原理の展開（現代法學の諸問題）」、「四五頁以下、参照。
- (9) Mirbt, Nr. 316, S. 172.

四

司教の選舉も亦ながらく俗權の干渉を受けた。

ローマ帝國領内に侵入して建國したゲルマン諸部族は、いずれもアリウス派のキリスト教徒であったが、ブルグンド族は、五一七年エバオ (Epaio) の公會議で、スペインの西ゴート族は、五八九年トレド (Toledo) の公會議で、カトリック教に改宗した。しかし、これよりさき、既に四九六年に、フランク族の王クロトヴィヒ (Chlodwig) は、

いち早くカトリック教に改宗したため、支配圏の擴張にあたり司教たちの協力を得て、着々功をおさめたが、司教の利用價值を知った王たちは、やがて司教の選任に干渉し始めた。當時、舊ローマ領ガリア地方には、司教區や首都大司教區が残っていて、聖職者と平信徒による司教の選舉もまた、普通に行われていたが、今や新しい支配者によって、次第に選舉が制限され始めたので、教會側は、五五年のバリーの公會議で、選舉制の復舊を試み、フランクの王クロタール二世 (Chlotar II.) もまた、六一四年のバリー告示で、司教の自由な選舉を承認したが、王權の強化に伴い、次第に選舉は行われなくなっていた。しかし、こうした選舉制の衰退を助長したものととして、ゲルマンの私有教會制 (Eigenkirchenwesen) を見逃すことができないであろう。

ゲルマン地方、特に農村には、昔からの祠堂が當時尙多く残っていたが、祠堂の設立者や敷地の地主は、その祠堂の所有者として、祠堂への奉納物を自己の所有となし、これが相當の収入となつたので、祠堂の建立、その賣買、賃貸、贈與などが盛に行われていた。ところが、やがて之に倣って、修道院も、收益の目的で設立され、私有物視されるものが現れたが、古くからの修道院についても、その所在地の領主、殊に王は、地主として、これを自己の私有修道院と看做し、恣に修道院長の任免を行った。こうした慣行は、やがて又、聖堂にも及び、司教が勝手に任免されたため、七世紀から八世紀の初めにかけて、教會制度が甚だしく亂れ、八十年間も公會議が開かれなかつたことさえあつて、首都大司教區制は全く崩れ去つた。聖職者は禮拜よりも狩獵を事とし、偽聖職者が出没し、聖堂の財産をかすめ取る者さえ現れたので、フランクの王たちは、銳意、教會の物的精神的革新に努めた。従つて、八世紀初めに大陸各地を巡歴して布教に努めたアングロサクソンの修道士ボニファチウス (Bonifatius) も、王の支援を受けて、その

布教活動を容易ならしめることができたのであるが、ボニファチウスは、教皇から特に布教辭令 (missio canonica) を受けて、各地に聖堂や修道院を建て、司教の聖衣 (Pallium) を各地の司教に傳達し、司教たちとローマとの關係を密にするとともに、公會議を復活して、首都大司教區制を再建し、フランク王國內に、ローマを中心とするカトリック教會組織を作り上げようとしたが、遂に成功しなかつた。⁽⁵⁾

紀元八〇〇年、フランクの王カール (Karl der Große, 768-814) は、教皇レオ三世 (Leo III.) の手から、帝冠を授けられて、ここに西ヨーロッパ全土にわたるキリスト教帝國 (imperium christianum) が出現したが、この帝國は、キリスト教的ローマ帝國の再現であるかのような觀を呈しながら、純粹な意味でのローマ教會的なるものではなかつた。カールは、教皇から加冠されたにもかかわらず、「神から加冠されたり (a Deo coronatus)」と稱し⁽⁶⁾、自ら帝國教會の首長 (rector ecclesiae) を以て任じたから、教皇は國內第一の司教たる地位に甘んじなければならなかつた。⁽⁷⁾ 従つて又、司教の選舉も常に、直接間接、王の干渉を受けざるを得なかつた。カールに次で位に即いたルートヴィヒ (Ludwig, 814-830) は、八一七年のアーヘン (Aachen) の國會で、「司教は、教會法の規定に従つて、聖職者と平信徒の選舉によつて、選任せらるべし (ut……episcopi per electionem cleri et populi secundum statuta canonum……eligantur)」と、自由な選舉を保障したが、その保障も空しく、王は益々干渉するようになったので、ランス (Reims) の大司教ヒンクマル (Hincmar, 780-805) の如きは、近隣の「司教たちと聖職者と平信徒が選舉をなすべきこと (…debet episcopi et clerus ac plebs eligere)」を度々主張したが、その效なく、王による司教の任命は益々多くなり⁽⁸⁾、しかも、司教杖 (baculus pontificalis) を「ンボルとして、司教座と、その附屬的諸權利を、封 (beneficium) と

して授與し、これに對して、司教をして王に忠誠を誓わせたから、司教の選任は、封建法上の敍任 (*investitura*) と全く同様になった。尤も、稀には選舉も行われたが、それは特に王から特許狀 (*privilegium*) が與えられた場合に限られていた。⁽¹¹⁾當時の特許狀を見ると、選舉には、聖堂付聖職者 (*clerus*) のほか、平信徒 (*populus*) として、聖堂の封臣 (*milites*) や町の有力者 (*primores, primates civitatis*) や教區内に住む家族 (*magnates*) などが参加しているが、これらには、王の息がかかっている者が多かった。⁽¹²⁾その上、適格者であることが條件とされていたから、當選者が王の意に適わなかつた時には、改めて王自ら任命したらしい。⁽¹³⁾

フランク王國の分裂後、西フランクでは、十世紀末カペー朝 (*Capétiens*) の初期に、王の司教敍任權は、多くの地方で、俗界諸侯の手に移ってしまった。これに反して東フランクでは、カロリング家の斷絶後、選ばれてドイツ諸種族の王となったコンラート一世 (*Konrad I. 919-925*) は、當時尙分立的傾向の強かつた諸種族を抑えるために、教會の力を藉りなければならなかつたが、衰微の極にあつた敍皇廳は、この機會に乗じて敍權の強化をはかろうとする氣概もなく、敍皇ヨハネス十世 (*Johannes X. 915-925*) の如きは、王の司教敍任を古來の慣習なりとして承認している。⁽¹⁴⁾ハインリヒ一世 (*Heinrich I.*) に次で位に即じたオットー一世 (*Otto I. 936-973*) は、カール大王の政策を踏襲し、王に忠實な司教を恣に敍任して、これらを種族公國各地の聖堂に配置して、中央集權を強化しようとし、⁽¹⁵⁾その後の諸王も、同じ政策を續けたため、中には、一介の平信徒で司教や修道院長に敍任される者もあり、社會一般の宗教心の低下も手傳つて、聖職者の中には、妻帶者も現れ、聖職賣買また盛に行われて、教會の頽廢目に餘るものがあつたため、次第に、各地の修道院に革新を要望する聲が起つたが、中でも、ブルグンドのクリュニー (*Cluny*) 修道院は、十一

世紀から十二世紀にかけて、フランスのみならず、イタリア、スペイン、イギリス、ドイツにわたって、一千以上の修道院や修道分院を、その傘下に収めて、一大革新運動を展開した。⁽¹²⁾ クリヒニーの運動は、やがて修道院から聖堂に及び、遂には教皇廳にも及んだが、妻帯の禁止 (coelibatus) や聖職買賈 (simonia) の禁止を徹底させるには、結局のところ、王の聖職敘任を嚴禁し、俗權からの「教會の自由」 (libertas ecclesiae) を確立しなければならぬとして、革新運動は遂に「教權主義」 (sacerdotium) 對「帝權主義」 (imperium) の戦いまで發展せざるを得なかつた。⁽¹⁷⁾

- (1) Conrad, Deutsche Rechtsgeschichte I, 1954 (以下 Conrad と略記す) S. 162—166
- (2) Plöchl I, S. 175.
- (3) Mitteis, Der Staat des hohen Mittelalters, 1953 (以下 Mitteis と略記す) S. 52f.
- (4) Fehr, Deutsche Rechtsgeschichte, 4. Aufl. 1948, S. 35f.
- (5) 石原「基督敎史」一五三—四頁、カトリック敎會史「一五〇—一六〇頁」參照。
- (6) Feine, S. 213. (7) Conrad, S. 164.
- (8) Hinschius II., S. 524 Anm. 1. (9) Hinschius II., S. 528 Anm. 2.
- (10) Conrad, S. 167. (11) Conrad, S. 167; Feine, S. 215, 224; Plöchl I., S. 336.
- (12) Hinschius II., S. 534. (13) Plöchl I., S. 335.
- (14) Conrad, S. 238; Feine, S. 215. (15) Conrad, S. 240.
- (16) クリヒニー修道院の傘下にあつた修道院の數は Feine, S. 227. ヒュグはノーター (Hugo, 1049—1109) が修道院長であつた頃には一〇〇〇近くあつたとあるが、Neub, S. 122. によれば、十二世紀初めには、約二〇〇〇あつたとす。

(17) 石原「中世キリスト教研究」(以下、石原、キ研究と略記す)、二五二—四頁、世良譯「ミッタイス」ドイツ法制史概説」(以下、ミッタイスと略記す)、一七〇頁、参照。

一〇四九年ランス(Reims)の公會議で、レオ九世(Leo IX.)は「聖職者と平信徒の選挙によるに非ざれば(sine electione cleri et populi)」、なにびとも教會統治の位に即ぐことを得ず(ne quis…… ad regimen ecclesiasticum proveheretur)」と宣言し、平信徒による聖職叙任禁止の第一聲をあげ、古來の教會法上の司教選挙の復活を主張した。次で、一〇五九年、教皇選挙法「イン・ノミネ・ドミニ」の布告後、ニコラウス二世が發した教皇回勅「ヴィギランチア・ウニヴェルサルリス」(Vigilantia universalis)の第六條(c. 6)は「いかなる聖職者も司祭も、平信徒によって、教會職位を無償でも有償でも受けることを得ず(ut per laicos nullo modo quilibet clericus aut presbyter oblineat ecclesiam nec gratis nec pretio)」として、聖職賣買の禁止を強調した。

しかし、これらは、いわば聖職叙任権争(Investiturstreit)の前奏曲に過ぎなかつた。俗權に對する戰の烽火は、教皇の絶對的優位を内外に向つて高々と宣言したグレゴリウス七世(Gregorius VII, 1073-1085)の有名な教令「ディクタートゥス・ババイ」(dictatus Papae)を以て初めて揚げられたのである。曰く「ローマ教會は、ただ神によつてのみ建てられたり(quod Romana ecclesia a solo Domino sit fundata)……ローマ教皇のみ司教を任免する(ut quod ille $\wedge$ Romanus pontifex $\succ$ solus possit deponere episcopos vel reconciliare)」と。グレゴリウスは、既に一〇七四年春のローマの公會議でも、聖職賣買の禁止を宣言したが、一〇七五年春、ローマの四旬節公會議で、再び聖職賣買の禁止を宣言し、多數のドイツ司教を破門し、その年の暮、ハインリヒ四世(Heinrich IV, 1056

1105)に最後通牒を送り、破門を以て威嚇した。これに對して、王は教皇の廢位を以て應え、教皇は王の破門を以て應酬し、遂に一〇七七年、王の屈辱的なカノッサ (Canossa) 行となったが、教皇側は、翌一〇七八年、春と秋との公會議で、繰返し繰返し、平信徒による聖職敍任の禁止を宣言し、特に、王による司教の敍任を嚴禁し、更に一〇八〇年春、四旬節公會議で、またもや禁止令を繰返すとともに、關係者の嚴罰を宣言し、ハインリヒ四世を再び破門した。その際、司教は「聖職者と平信徒……これを選擧し (clerus et populus……eligat)……教皇または首都大司教の承認を受くべきものとす (apostolicæ sedis vel metropolitani sui consensu)」と定め、これを古來の慣習なりと主張した。かくして、その後、半世紀近くも闘われた聖職敍任權の争が開始されたのであるが、フランスやイギリスにおいてもまた同様の問題が起った。⁽⁸⁾しかし、これらの國ではドイツにおける程には争が激しくなかつたので、フランスでは一〇九七年に、イギリスでは一一〇七年に、早くも王と教皇との間に妥協が行われた。

ドイツにおいても、いろいろ調停案が出たが、反對が多くて中々まとまらず、ようやくハインリヒ五世 (Heinrich V, 1106-1125) が戴冠式舉行のためにローマに赴いた時に機が熟し、一一一一年二月、ローマ近くのストリ (Sutri) で王を迎えた教皇パスカリス二世 (Paschalis II, 1092-1118) との間に話合ができ、教皇は、ドイツの司教たちに命じて、俗界の權 (temporalia) すなわちオットー一世以來ドイツの司教たちに授與された一切の高權 (regalia) と領地を王に返還させることを王に約し、その代り、王は、聖職敍任權 (investitura) を放棄し、教會法に従った司教選舉を保障する旨を教皇に約した。⁽¹¹⁾このストリの協約は、原理としては最も正しい解決案であったが、理論上正しいとはいえ、ドイツの司教たちにとっては長年諸侯として享受した政治上の地位と特權とを今突如として放棄することに

なるから、到底忍び得ざるところであり、欲せざるところであった。⁽¹²⁾ 又、俗界諸侯にとっても、教會封を失う惧れがあるから、好ましくなかったし、王の手元に莫大な領地が返還され、王の権力が強化されるということは、聖俗兩諸侯ともに耐え難いことであった。さればこそ、ローマのペテロ聖堂で、この協定が發表されるや、忽ち大混亂を惹起したので、王は前言を齟さざるを得なかったが、教皇もまた、王に對して加冠を拒否した。そこで王は數ヶ月間教皇を幽閉し、遂に教皇をして大讓歩をなさしめた。すなわち、教皇による敍階が行われる前に王による敍任が行わるべきことを、教皇は遂に承認せざるを得なかったのであるが、勿論これは教皇側の到底忍び得ざるところであったから、ハインリヒ一たびローマを去るや、聖職者たちは公會議を開き、教皇が王に與えた右の特權 (Privilegium Paschalis) の撤回を宣言し、平信徒による聖職敍任の禁止を繰返し宣言し、二十三名の樞機卿と百十四名の司教が署名した決議文をハインリヒのもとに送付した。かくして争は再び激化した。⁽¹³⁾

(1) Mirbt, Nr. 267, S. 138. 尙 Conrad, S. 386. 參照。

(2) Mirbt, Nr. 271, S. 143. 尙 Conrad, S. 386. 參照。

(3) Mirbt, Nr. 278, S. 143. 尙 Mitteis, S. 196. 參照。

(4) Mirbt, Nr. 281, S. 149. 參照。 (5) Mirbt, Nr. 284—287, S. 150. 參照

(6) ハンブルク・ブレーメンの大司教リーマル (Liemar) を初めとする四人のドイツ司教と、三人のロンバルディアの司教と、五人の王室顧問官を破門し、平信徒による聖職敍任を全般的に禁止し、特に、王の司教敍任を禁止した。ハインリヒは、それにもかかわらず、テダルドゥス (Thedaldus) をミラノの大司教に敍任し、その他多くの司教を敍任した。

そこで、遂にグレゴリウスは、その年十二月八日に、最後通牒ともいうべき書簡を王に送り、使者の口を通じて、ハイリヒを誅殺し、場合によっては破門も亦やむなしと威嚇したのである。Ficker, *Das Mittelalter*, 1929, S. 82.

(7) Mirbt, Nr. 294, S. 153. 管下の世を Mirbt, Nr. 287, S. 150; Nr. 291, S. 151; Feine, S. 237. 参照。

(8) Mitteis, S. 190 f. 参照。ヌウェーデンヤノルウキーでは、この問題は、ようやく十三世紀後半に起った。Feine, S. 237 Anm. 10 a.

(9) ドイツ皇帝との關係が緊張するにつれ、教皇ウルバヌス二世 (Urbanus II, 1088-1097) は、故國フランスの王との親交關係を保とうとしていたためでもあるが、當時七十七あった司教區の中、王が直接司教を敍任したのは精々二十五ぐらゐであつたから (Mitteis, S. 151)、敍任權の問題では、王と教皇との關係は、ドイツの場合ほどには緊張しなかつた。従つて、一〇九五年、クレモン (Clement) の公會議で、司教が平信徒に忠誠の誓を立てることを禁止し、争が起つた時にも、當時チャートルの司教イヴォ (Ivo 又は Yves de Chartres) を初めとして、フランスの學界で展開されていた「俗界の權」(temporalia) と「聖界の權」(spiritualia) を概念的に分つ説を容れて、一〇九七年に、妥協ができた。王は、聖職のシンボルである指環と司教杖とを以て司牧の權を授與する權利は放棄するが、選挙に關與し、司教に忠誠の誓 (hominium) をなする等、俗界の權である高權 (regalia) を授ける權利は留保した。Feine, S. 238; Seppelt, S. 206 f.; Cambridge V, p. 88. 参照。

(10) イギリスでは、豫てキャンタムリー (Canterbury) の大司教ランフランク (Lanfranc) が、クリュニー精神を以て、イギリス教會の革新にとめていたが、王の聖職敍任を默認したので、教皇の聖職敍任禁止令は勵行されなかつた。ランフランクの後任者アンセルムス (Anselmus) もまた、ウィリアム二世 (William II, 1087-1100) に封建法上の忠誠を誓い、王から指環と司教杖で敍任を受けたが、王が恣に聖職を敍任するのを見かねて、これに反對したため、一〇九

七年に追放され、イタリヤで熱心な革新運動家となった。ヘンリー一世 (Henry I, 1100-1135) 即位し、アンセルムスの寵免を取消して、これを呼戻したが、アンセルムスは、王に忠誠の誓を立てることをあくまで拒否した。しかし、いろいろ折衝の末、ようやく一一〇六年に妥協が成立し、一一〇七年の國會で承認された。ここでもイヴォの説を採用して、王は指環と司教杖で敍任する權を放棄するとともに、教會法による司教選舉 (electio canonica) を認め、選舉は「王の臨席のもとに」(in praesentia regis) 行われべきものとされ、王宮内で行われたから、王の干渉を排除することが出来なかつた。フランスと同様、司教は、選舉後、王に忠誠を誓ひ、そのあとで敍任された。Mitteis, S. 217, Feine, S. 238; Ficker, S. 86.

(11) Plochl II., S. 184; Neub., S. 153.

(12) Feine, S. 237 f.

(13) Feine, S. 237 f.; Plochl II., S. 185; Neub., S. 153; Cambridge V., p. 102.

はてしなく争われた敍任權の争も、ようやく一一二二年九月二十三日ヴォルムスで、解決されることとなった。教皇カリストゥス二世とハインリヒ五世との間に締結された此「ヴォルムスの協約」(Wormser Konkordat) は、既にフランスの學界で展開されていた「俗界の權」(temporalia) と「聖界の權」(spiritualia) との概念的區別を援用することによって、巧みに帝權と教權との妥協をはかつたものである。⁽¹⁾ すなわち、皇帝には、俗界の權である領地や、その支配權を授與することが許されるが、教皇には、「皇帝の與えた特權」(privilegium imperatoris) として「教會法上の選舉と自由な敍階が行われべきこと」(canonicam feri electionem et liberam consecrationem) が認められた。⁽²⁾ すなわち長年の主張であった「教會法上の選舉」(electio canonica) が認められ、選舉のあとで教皇による

「敘階」(libera consecratio)が行われて、聖界の權である司教の權が與えられるのであるから、選舉に對する俗權の干涉が完全に排除されたわけで、この點で、教皇側の主張が通つたが、尙、敘任(investitura)との關係の問題が残っている。同じく皇帝の支配領域であつても、イタリアとブルグンドでは、選舉後、教皇による「敘階」が行われ、そのあとで、皇帝による「敘任」が行われるから、教皇側の主張通りであるが、皇帝が王として直接支配するドイツでは「敘階」に先だつて、すなわち選舉の後で、王が「敘任」を行うことが認められた。従つて、敘任の前提條件としての選舉の審査が必要となり、教皇は、ドイツ王に對して「ドイツ王國內の司教と修道院長の選舉は(electionem episcoporum et abbatum Teutonicæ regni)汝(=ドイツ王)の臨席のもとに行むるべきこと(in præsentia tua feri)」を「教皇の與えた特權」(privilegium pontificis)として認めざるを得なかつた。すなわち、ドイツ王は、豫め代理の役人を派遣して——イギリスで既に認められていた「王の臨席のもとに」(in præsentia regis)——選舉を監視することになつたのである。かくしてここに王が干涉する餘地が残されたのであるが、尙その上に、教皇は、選舉の際「黨派がわかれた場合には(siqua inter partes discordia emerit)……首都大司教と同僚の(すなわち同じ管區内の)司教たちの助言と判斷に従つて(metropolitani et provincialium consilio vel iudicio)一層健全な(=優秀な)部分(=側)に、汝(=王)が同意と支持を與へること(saniori parti assensum et auxilium præbeas)」を認めた。すなわち、ドイツ國內と限つてはおろが、二重選舉の審査權と裁決權とを王に認めたのである。ところで、この協約でようやく認められた「教會法上の選舉」(electio canonica)とは、昔からの「聖職者と平信徒による」(clero et populo)選舉のことであつて、當時はまだ、司教座聖堂の聖職者のほか、司教區内の貴族、

封臣、家人、その他、市民の中の有力者が選挙に参加していた。⁽⁴⁾

ヴォルムスの協約は、ドイツ側では、同年十一月十一日バンベルグ(Bamberg)の國會で全会一致で承認され、ローマ側では、翌一三三年三月のラテラノ公會議で承認された。「王の臨席」については、ローマの聖職者間に強い反対があつたが、教皇は、平和のために忍ぶべしといつて、一同を宥めたといわれる。⁽⁵⁾ところの間もなく、一三二四年にはカリストゥス、一三二五年にはハインリヒが相次で死去した。俗權の干涉、殊に「王の臨席」を怪しからぬこととし、ヴォルムスの協約の早期廢棄を望んでいたローマ教會側は、協約締結の當事者を以て、ドイツ國ではなしに、ハインリヒ五世個人であるとなし、ハインリヒの死を以て、當然協約は失効したものと主張した。⁽⁶⁾

かくして争は再燃し、その後十數年間も續いたが、遂に一三九九年のラテラノ公會議で、インノケンチウス二世(Innocentius II, 1130-1143)は、ヴォルムスの協約の規定の部分的廢棄(derogatio)を宣言し、「王の臨席」の項を削除して、王の役人の司教選挙への介入を排除した。しかし、同時に又、平信徒の参加をも排除し、司教選挙は、専ら司教座聖堂付聖職者、すなわち聖堂參事會員(capitulares)のみによつて行わるべきこととした。もとより、ところにより必ずしも直に、この規定通り行われたわけではなかつたが、平信徒や他の聖職者は、次第に選挙から除外されて、遂に司教座聖堂參事會員が司教選挙權を獨占するにいたるのである。⁽⁷⁾前にも述べた通り、既に八世紀頃から、平信徒は教會事項に直接に關與すべきではなく、ただ服従すべきものであるとされて、教會は「聖職者の團體」(universitas clerici)となつていったが、同じく司教座所在都市の聖職者でも、特に日常司教の身邊にあつて、禮拜や事務に參與し、司教の相談相手となる聖職者、すなわち、司教座聖堂參事會員だけが、恰も教皇廳における樞機卿と同様

に、司教を選擧する權利を獨占することになったのである。

- (1) ミッタイス、一七二頁、參照。
- (2) Mirbt, Nr. 305, a, S. 162.
- (3) Mirbt, Nr. 305, b, S. 162
- (4) Hinschius II, S. 560.
- (5) Seppelt, S. 116; Cambridge V., p. 162—3. (9) Feine, S. 238; ミッタイス、一七三頁、參照。
- (7) Plochl II., S. 190; Neub., S. 181 一三九九年の公會議での俗權の排除宣言は、堂々と明示的になされたが、平信徒や他の聖職者の除外は極めて暗示的になされた。従つて、既に一一二二年のヴォルムスの協約で、司教座聖堂參事會が選擧權者と定められた、となすミッタイス(世良譯、一七二頁)の説は誤りである。一一三九九年の決定では、司教區内の修道士を召集しないで行われた選舉は無効なりとして、平信徒の不参加が無効原因にならぬこと、従つて、平信徒の除外を間接的に暗示しているが、召集された修道士には、ただ候補者の選定にあたり相談にあずかることと、聖堂付聖職者 (canonici, capitulares) が行つた選舉に同意 (assensus) を與えることだけを許すと規定して、間接的に、聖堂付聖職者たる參事會員だけが選舉權者であることを明らかにしてゐるのである。Hinschius II., S. 603.

司教座聖堂參事會 (capitulum) という聖堂付聖職者の團體の形成を促したものは、彼等のなした修道院的共同生活であつた。凡そ三四世紀頃、エジプトから小アジアにかけて、靈魂の完全な純潔と神聖とを慕い、俗化した都會を避けて、遠く荒野に隱遁し、修道生活 (vita religiosa) を求める人々が現れたが、これら「孤獨者」とか「陰棲者」という意味で「モナコス」(monachos) と呼ばれた人々も、やがて絶對孤獨の生活の無意味を感じて、同志相集つて團體的な共同生活をなした⁽¹⁾。こうした風習が四世紀末に、都市の聖堂付聖職者にも傳つて、北伊ヴェルチェリ (Vercelli) のエウセビウス (Eusebius) や、北アフリカのヒッポ (Hippo) のアウグスチヌス (Augustinus) のよ

うに、聖堂付聖職者たちと一つ家で共住生活をなしたのもあったが、⁽²⁾ようやく六世紀初めに、ヌルシア(Nursia)のベネディクトゥス(Benedictus, 481-543)が共住生活を組織化し、ローマの南方カシノ山(Monte Cassino)に修道院(monasterium)を建て、共住生活の厳格な戒律(regula)を作ったが、⁽³⁾八世紀頃になると、こうした修道士の戒律生活を、聖堂付聖職者までが倣ねて、厳格な戒律(canon)のもとに「共住生活」(vita communis)を営む風習がヨーロッパ各地にひろまった。彼等は戒律生活(vita canonica)を営む者という意味で、カノニクス⁽⁴⁾(canonicus)と呼ばれたが、やがて、ベネディクトゥスの戒律(regula Benedicti)を基にして、カノニクスたち(canonici)のために、共住生活の戒律が作られた。その最初のものとして、メス(Metz)の司教クロードガン(Chrodegang)が七六〇年に、メスの聖堂付聖職者のために作ったものが知られている。それによれば、カノニクスたちは、クラウストラ⁽⁵⁾(claustra)と呼ばれる修道院内で、平信徒や婦女子を遠ざけて、共住生活を営み、厳格な戒律を守って、共同の寢室(dormitorium)や食堂(refectorium)で、日夜寢食勤行を共にし、聖書や聖務日課を毎日一章ずつ(Capitulum)読み聞かされ、一同揃って、これを合誦し祈禱するのを務めとしたので、九世紀頃から、カノニクスたちは又、カピトゥラーレス(capitulares)と呼ばれ、これらが構成する團體は、カピトゥルム(capitulum)と呼ばれるようになった。⁽⁶⁾

かくして九世紀には、一般聖職者も戒律生活を営むようになったが、このような風習が盛になったことについては、修道士ボンファチウス(Bonifatius, 750-84)やフランクの王たちの努力に負うところが多い。カール大王(Karl, 768-814)の八〇五年の一勅令は、聖職者は、必ず戒律生活(vita canonica)か、修道院生活(vita monastica)か、

いづれか一つを選ぶべきものと定めている⁽⁷⁾。カールの後繼者ルートヴィヒ (Ludwig, r. 817-840) は、八一六年のアーヘン (Aachen) の公會議で、新にカノニクスの共住生活戒律 (regula canonicorum) を作らせ、全国的に行わせた⁽⁸⁾。このアーヘン戒律は、大體クロードガン戒律 (regula Chrodegangi) を基にしたものではあるが、共住生活 (vita communis) をなすことによって修道士 (monachus) となるのではないとして、カノニクスとモナクスとを區別し、カノニクスが修道士の服裝をなすことを禁じ、カノニクスには私有財産も或程度認めている⁽⁹⁾。ところが、聖堂の財産や収入は、一切司教が管理し、國家のためと稱し、多くは司教個人の意思で、聖堂財産の供出がしばしば行われたので、カノニクスすなわちカピトゥラーレスは、財産の保全を要求し、その結果、司教の管理財産 (mensa episcopalis) と、カピトゥラーレスの共同財産 (massa communis) であるカピトゥルムの財産 (mensa capituli) とが區別され、司教は後者に手をつけることができなくなった⁽¹⁰⁾。折柄、十世紀から十一世紀にかけて、カピトゥラーレスの共住生活が崩れ始め、各自は共同財産の分配を要求し始め、それぞれ舍宅 (curia) が與えられて、これに住み、カピトゥルムの財産 (mensa capituli) から、生活費として、封建騎士の封と同様に、聖職祿 (beneficium, praebenda) が支給され、クロードガン戒律時代の無所有の完全な共住生活は忘れられ始めたが、聖書や聖務日課の合誦と祈禱は、尚普通り集って行い、出席者は日當の分配 (distributio quotidiana) を受けた⁽¹¹⁾。かくして十一世紀には、殆ど、どの聖堂でも、戒律生活 (vita canonica) が行われなくなった。それ故にこそ、クリュニー (Cluny) 修道院を中心として、戒律生活の復活運動が起つたのであるが、十一世紀後半には、カノニクスたちは再び戒律を誓約して共住生活を營むようになり、しからざる在俗聖職者 (canonici saeculares) と區別されて、立誓共住聖職者 (canonici re-

gulares)と呼ばれ⁽¹²⁾、これらが、十一世紀から十二世紀の初めにかけて、次第に司教都市の他の聖職者や有力な平信徒を排除して、司教の顧問として活躍し始め、一一三九年の公會議以後、司教選舉權をも獨占し、それらが構成する司教座聖堂參事會 (capitulum) が、やがて法人的統一體と考えられて、司教選舉權の主體となるのである。⁽¹³⁾

(1) 石原「基督教史」一八五—一六頁、參照。尙、monachus (按) monk (英) Mönch (獨) は、このギリシヤ語の monachos に由來する。

(2) Hinschius II, S. 50.

(3) 石原、前掲書、一八七頁。尙 monastery (英) monastère (佛) Monasterium (獨) は、この monasterium に由來する。

(4) 何故カノニクスと呼ばれたかについては説がわかれている。Plöchl (I, S. 320) は、四世紀頃、東方教會で修道士を指してカノニコス (canonichos) とギリシヤ語でいったが、これが六世紀頃、西ヨーロッパに傳わり、聖職者を一般に指して用いられ、共住生活が盛になるに及んで、意味が限定されたのだと説き、Feine (S. 177. Anm. 7) は、共住生活者名簿をカノン (canon) としたので、カノンに登録された者という意味で、カノニクスとつたと説く。しかし、恐らくは Hinschius (II, S. 51) の説くように、使徒行傳、第四章三二の「信じたる者の群 (むれ) は、おなじ心おなじ思となり、誰一人その所有 (もちもの) を己が物と謂わず、凡ての物を共にせり」という戒律 (canon) に従った生活をなす者という意味であろう。

(5) cloister (按) cloître (佛) Kloster (獨) は、この claustra に由來するものとされる。

(6) Feine, S. 178; Plöchl I, S. 320. (7) Hinschius II, S. 52; Plöchl I, S. 321.

中世における教皇と司教の選舉

- (8) Hinschius II., S. 52; Feine, S. 178.   (9) Pöchl I., S. 321.
- (10) Feine, S. 189.
- (11) Feine, S. 190; Gierke, Genossenschaftsrecht I., S. 289.
- (12) Feine, S. 232; Hinschius II., S. 57; Pöchl I., S. 321.
- (13) Hinschius II., S. 61; Cambridge VI., p. 39.

五

幾世紀かにわたって闘われた激しい俗権との闘争の間に、教皇選舉については樞機卿會 (collegium cardinalium. College of Cardinals, collège des cardinaux, Kardinalskolleg) が、司教選舉については司教座聖堂參事會 (capitulum, chapter, chapitre, Domkapitel) が排他的選舉團として成立し、選舉權を獨占するようになった。ゲルマン的團體意識に支配されていた中世ヨーロッパにおいては、これらの團體は尙まだ仲間組合的な協同體 (Genossenschaft) と考えられ、従つて又、全會一致で選舉が行わるべきものとされていたが、教會法學者の間では、ローマ・カノン法的に、一個の統一體と考えられ始めていた。尤も、法人の概念構成は、ようやく十三世紀になつてから行われるのであるが、既に十二世紀末には、樞機卿會や司教座聖堂參事會は、法人的統一體と考えられ、選舉權の主體であると考えられたのである。さればこそ、その統一的意思の形成について、一一七九年の第三回ラテラノ公會議は、尙、初めから全會一致となることを理想とし、少くも、少數が多數に同調して、全會一致となることを望みながら、

萬一それが不可能な場合には、多數決もまた可なりとしたのである。すなわち、司教 (episcopus) や修道院長 (abbas) などの高位聖職者 (praelatus) の選舉については、「參事會 (capitulum) の一層大なる部分または一層健全な部分」(maior vel sanior pars capituli) の票を得た者を以て當選者となし、いづれが「一層健全な部分」(sanior pars) であるかの審査判定は、これを上位者 (superior) である教皇に委すところの、いわば質的多數決ともいふべき「優秀決原理」(Sanioritasprinzip) が確立され、至上の地位 (primatus) に在って、これを審査する上位者のない教皇の選舉については、二重選舉や皇帝の干渉を避けるために、専ら「三分の二」(duae partes) とする「數」そのものによつて、當選者を決定することにして、初めてここに「多數決原理」(Majoritätsprinzip, rule of majority-principle) が制度的に確立されたのである。しかし、選舉の詳細な手續は別にこれを定めず、従來からの慣行に任せていたのであるが、やがて、これも詳細に規定する必要に迫られ、一二一五年の第四回ラテラノ公會議 (IV. Laterano concilium) において、選舉法施行細則ともいふべきものが公布された。⁽²⁾

それによれば、いわゆる「教會法上の選舉」(electio canonica) は、次の三種の方法のうち、そのいづれかによるべきものとされる。

一、エレクトチオ・クワジ・ベル・インスピラチオナーネム (electio quasi per inspirationem) すなわち、恰も靈感 (inspiratio) を受けたかのように、期せずして全員がこぞつてなす推舉。

二、エレクトチオ・ベル・スクルチニウム (electio per scrutinium) すなわち、一人一人が、集票員 (scrutatores) に對して、口頭でなす投票。

三、エレクトオ・ベル・ロムプロミッサム (electio per compromissum) すなわち、調停員 (compromissarii) によって行われる間接投票。

簡單には、靈感式 (forma inspirationis)、集票式 (forma scrutini)、調停式 (forma compromissi) と呼ばれるが、これら三種の選挙方法は、この時初めて新に制定されたのではなく、従前から慣行として既に行われていたものを、法律を以て確定し制度化したに過ぎない⁽²⁾。

(1) 町田「多数決原理の展開」現代法學の諸問題、二四三—六頁、参照。

(2) Cambridge IV, p. 39; Wretschko, Die electio communis bei den kirchlichen Wahlen im Mittelalter. Deutsche Zeitschrift für Kirchenrecht, XI, 1900 (以下 Wretschko と略記す) S. 327.

(3) Cambridge IV, p. 39; Wretschko, S. 327; Feine, S. 335 f.; Hinschius I, S. 280—2. カトリック大辭典 I、六四〇頁には、一は全員推舉、二は投票、三は妥協選挙と譯されているが、筋に過ぎ、誤解を招く惧れがある。筆者は、舊稿では、三の compromissarii を「妥協係」としたが、本稿では「調停員」と改めた。

そもそもゲルマン的團體意識に支配されていた當時においては、俗界の團體は勿論のこと、聖界の諸團體も、仲間組合的協同體と考えられ、選挙も本來は全會一致を建前としていたが⁽¹⁾、キリスト教の信仰からいっても、一同の心が一つになり、期せずして意見の一致が見られたということは、偏えに聖靈の御導きによるものであり、神の攝理であるとして、しばしば大袈裟な言葉で、神に感謝の祈りをささげている⁽²⁾。全員一致の推挙の最も古い例としては、三世紀前半のローマの司教(教皇)ファビアヌス (Fabianus, 286—296) の選挙⁽³⁾をあげることができるであろうが、五世紀

中頃の教皇レオ一世 (Leo I, 440—461) の或教令は「全會一致の選舉 (electionem concordem) は神明の靈感によるものである (inspiracionis esse divinae)」と記している⁽⁴⁾。十二世紀になってからでも、「すべての者の全會一致 (unanimitas omnium concordia) は全く主キリストからのものである (non nisi ex domino esse)」と考えられている⁽⁴⁾。従って、選舉のために集った樞機卿たち (cardinales) や、司教座聖堂參事會員たち (capitulares) が、豫め打合せや、下相談をなすことなしに、また、誰に投票するか、との質問も待たずに、即座に、恰も (quasi) 靈感を受けてなしたかのように (per inspirationem) 特定の一人の名を呼んで、これを推舉した場合には、これを「靈感による全員一致の推舉」(electio quasi per inspirationem) と名付け、これこそ最も理想的な選舉方式であると⁽⁵⁾なしたのである。

(1) Wretschko, S. 339 f., 375 f. 参照。尙、ヴレチュコは同書三二九頁及び同頁註二において、九世紀頃の書簡や選舉告示や、その他の文書に、當時、教會の選舉がゲルマン法的に全會一致を以て行われていたことを示す左記のような表現が見出されることを指摘している。concorditer eligere; electio concors; pari consensu ac concordia eligere; unanimis conclamaverunt; adclinatorum unanimitas; communi voto eligere; pari voto communicque consiliis eligere; uno voto parique consensu; pari voto unanimique consensu eligere。シムメクス (Symmachus) が四九九年の教皇選舉法で「多數の意見が決定す」(vincat sententia plurimorum) と規定したのは、例外ではなくして、當時は尙ローマ法的に多數決が普通とされていたものと見るべきであらう。

尙わが國においては多數決はおろかなこと、合議制度自體が、ヨーロッパの意味においては發達しなかつた。和合の精神を以て問題を解決した、といへば、いかにも美しく聞えるが、實は、權利思想が發達しなかつたために、主張すべ中世における教皇と司教の選舉

きことを主張しないで、うやむやのうちに妥協してしまふのが常であった。

牧健二「我が中世の寺院法に於ける僧侶集會」法學論叢、第一七卷四號六號によれば、わが國には、合議制度が發達せず、鎌倉幕府の評定衆や近世町村の寄合なども、法律的に確固たる制度ではなかつた(同書五六二頁)。ところが「印度思想は人倫に價値の平等を認め、衆の議によつて衆の事を決しようと言ふ思想が最も濃厚であつた」(五六三頁)ために、佛教とともに寺院における僧侶集會の制度が、わが國にも渡來し、中央集權の力が最も微弱であつた平安朝期の末から、鎌倉及び室町の時代にかけて、此制度が最もよく發達するに至つた」(五六五頁)。出席義務を意味する「見參」の制度はあつたが、定足數の制度はなかつた。賛成は沈黙、不賛成は發言によつて表示されたが、(八九九頁、九一七頁)、不賛成の發言があつた時には「審に聽取したる上にて、多數決に依つて可否を決した」。このことは、「多人語即ち多數の投票に依つて決せらるべき戒律上の裁判制度」において「最もよく之を知り得る」(九〇〇頁)と、牧教授はいわれるが、投票にさきだち「努めて不賛成者を道理を以て賛成に導く」のであり(九〇六頁註六)、その上「僧伽」すなわち僧侶の集團は「和合衆」といわれる位に、「和合を以て精神とする」ものであつて(五六九頁)、「表決の投票が僧伽の分裂を來すべしと思惟させらるるとき」には「表決の投票を爲すに至らしめず、或は假令表決の投票が行われても、無效と認めた」(九〇一頁)とあるから、多數決は制度としては、未だ行われず、精々のところゲルマン古代の全會一致に近い、衆の承認を得るための投票が行われたに過ぎないものと見るべきであらう。この場合「合議が喧嘩になる虞れを避け」て、賛成は沈黙、不賛成のみ發言させた(八九九頁)のは、意思表示の方法にも、積極的なヨーロッパ人と比べて、東洋人の消極性が現れていて誠に興味深いものがある。

(2) Wrietschko, S. 339. 参照。

(3) ローマの司教(教皇)アンテルヌス(Anternus)の死の直後、ファビアヌスは、友人たちと連れだつて、田舎からローマ

にふらりとやって来た。折柄ローマの聖職者たちは、ローマの司教(教皇)後継者の選挙のために集って、いろいろ候補者の名をあげて談し合っていたが、誰もフアビアヌスのことは思いつかなかった。ところが、突然、空から一羽の鳩が舞いおりて、フアビアヌスの頭の上を、恰も聖霊のように、飛翔したので、一同感に打たれて、「この人だ」と、異口同音に叫んで、フアビアヌスを直に司教座に即けた、という話が伝えられている。Casper I., S. 49.

- (4) ブーン(Arles)の司教の選挙に關するレオ一世の教令(四四九年)に“*quia electionem pacificam atque concordem, cui nec merita morum nec studia civium defuerunt postulationis quidem humane, sed inspirationis credimus esse divinae*”とある。Wretschko, S. 328 Anm. 3. 参照。

- (5) 一一一五の選挙法、第二四條(Mirbt, Nr. 332, S. 182)には“*次*のように記してある。“*c. 24: ..... electio ..... communiter esset ab omnibus, quasi per inspirationem divinam, ... celebrata.*”尙、Wretschko, S. 381 f.; Hinschius I., S. 280. 参照。

しかし靈感は、そうしばしばあるものではないから、全員一致の推挙は寧ろ例外に屬すべきものであった。初めのうちは、選挙場に一同が集ったところで、一定の順序で、一人ずつ前に進み出て、口頭で「何某を選ぶ(*eligo. talem*)」と述べたのであるが、普通は、選挙人の中で地位聲望の一番高い者が最初に投票し、他の者がこれにつづいたので、最初の口頭投票(*prima vox*)が、それにつづく人々の投票に影響を及ぼした。勿論、法律上は、最初の口頭投票によって後の投票が拘束されることはなかったが、事實上、最初の口頭投票が選挙の結果を左右した。⁽¹⁾それ故に、

このような弊害をさけるためと、且は、一七九九年以來、教皇の選舉の有效性の要件として、三分の二の多數決が認められ、票を集計する必要が起ったところから、別室で「集票員に對してなす投票」(electio per scrutinium)が、一般に、司教の選舉についても、行われるようになった。選舉團の中から若干名、通常三名 (tres de collegio) —— 教皇選舉については、樞機卿の三品級 (ordo) となつ、すなわち司教、司祭、助祭の各品級から一名ずつ、合計三名 —— が選任され (assumantur)、集票員 (scrutatores) となり、他の者の票を集めるのであるが、それに先きだち、先ず以て、この集票員の票を集める者を定めて、集票員の投票をすませてから、他の者の投票が行われる。投票は凡て口頭で行われるから、他の者に聞かれぬように、選舉人一同が集っている廣間から、一人一人別室に赴く。そこには集票員が控えていて、祕かに (secreto) 全部の者の發言を一人一人聞く (singulatum voces cunctorum exquirant)。選舉人が、口頭を以て候補者の名をあげて、その者に投票する理由を述べると、集票員は、書記をして、直にこれを書面に記録させる (in scriptis redacta)。このようにして全員の投票が終ると、集票員は、票の集計と審査 (collatio) を行い、廣間に待機してゐる一同に、候補者の名と得票數とを公表する (publicent)。(2)

(1) 例えば、或司教座が空位となり、その後繼司教選舉で (in electione episcopi) 修道院長 (abbas) が最初に口頭投票 (prima vox) をなしたので、一同がこれを承認せざるを得なかつた (quam debent omnes confirmare) とすわれ
cf. Wreischko, S. 339 Anm. 1.

(2) 一二一五年の選舉法、第二四條 (Mittl. Nr. 332, S. 181) には、次のやうに記してある。"c. 24: ..... assumantur tres de collegio ..... qui secreto et singulatum voces cunctorum diligenter exquirant et in scriptis redacta"

cta mox publicent in commun. ....” 尙、Hinschius I, S. 264 Ann. 4. に「ハンキサンデノ三世とヴァントル世の二重選舉の前に書かれた皇帝派の樞機卿の書簡が引用してあるが、それによれば「すなわち若干名 (aliquae personae) が、彼等の仲間から (de eisdem fratribus すなわち樞機卿たちから) 隔離され (segregantur すなわち別室において)」、一人一人の意見を聴き (audiant voluntatem singulorum)」、よく訊ねて、忠實に記録した (fideliter describant)」とある。尙、全文を掲げれば “scilicet quod segregantur aliquae personae de eisdem fratribus, qui audiant voluntatem singulorum et diligenter inquirant et fideliter describant.” 口頭での投票を他の者に聞かせないようにと、別室で行われ、これを「隔離され」(segregantur) とか「秘かに」(secreto) とかと表現してゐるところから、この集票員に對してなす投票を、秘密投票 (カトリック大辭典、I、六四〇頁) と名付けたり、secret ballot (Cambridge VI, p. 39) であるとか、geheime Stimmzettelwahl (Feine, S. 335) であるとかと、説明する者があるが、無記名投票と混同し誤解を招く惧れがある。なるほど、投票が全部終るまでは、同僚が誰に投票したかわからないが、少くも集票員たちは、誰が誰に投票したかを知っているし、記録の誤りをさけるために、集票員が記録させた投票簿は、各選舉人に閲覽させたから、いわゆる秘密投票ではなかつた。今日の無記名の秘密投票は、十六世紀中頃、トリエント (Trient) の公會議で、初めと認められ (Gierke, Genossenschaftsrecht, IV, S. 92)、『十七世紀中頃』から、グレゴリウス十五世 (Gregorius XV) の一六二一年十一月二十三日の教令 (Aeterni Patris) と、『一六二二年三月十二日の教令 (Decret Romanum Pontificem) 』によつて詳細に規定された。すなわち、毎日二回午前と午後、投票用紙による無記名の秘密投票が行われ、誰かが三分の二の多數の票を得るまで繰返されることに定められ、今日にいたるのである。Seppelt, S. 241 f.; Feine, S. 282. 参照。尤も、投票用紙 (schedulda) は既に十五世紀中頃に用いられ始めてゐるが (Hinschius I, S. 282 Ann. 8)、『Feine が三三五頁 p. 111 一五年以來 geheime Stimmzettel-』

中世における教皇と司教の選舉

teiwahl (投票用紙による祕密投票) が行われたとなすのは、彼自身の二八二頁の説明とも矛盾し、明確に誤りである。

右に述べた集票員に對して口頭でなす投票が最も普通の方法であるが、選舉人の意見が非常にまちまちで、この方法では、候補者一名を決定することが到底不可能な時、又は、その困難さが豫想される時には、「調停員によって行われる間接投票」(electio per compromissum) が行われる。先づ選舉人一同が、全會一致で、若干名の調停員 (compromissarii) を選任し、これらに選舉をなす權限 (eligendi potestas) が委任される (commitatur) のであるが、⁽¹⁾ 修道院長 (abbas) の選舉では、選舉人である修道士の數が非常に多くて纏りが悪いから、古くから好んで、この方法が用いられていた。十二世紀になつてからでも盛に行われたらしく、例へば、一一一九年のファルファ (Farfa) の修道院での修道院長の選舉の際には、十二名の修道士が修道院長を選舉することになり、これらの修道士が選舉した人を修道院長と認めることを互に約束している。⁽²⁾ 教皇の選舉についても、一二一五年のラテラノ公會議の決定以前に、既に十二世紀から行われていたらしく、少くも記録の示すところによれば、既に述べた通り、一一三〇年二月十三日のインノケンチウスの選舉は、八名の調停員によつて行われている。⁽³⁾

(1) 一二一五年の選舉法、第二四條 (Mirbt, Nr. 332, S. 182) は次のように記してゐる。"c. 24: ..... eligendi potestas aliquibus viris idoneis committatur, qui vice omnium ecclesie viduatae provideant de pastore."

(2) Wretschko, S. 328 Anm. 1. 參照。

(3) Wretschko, S. 328, 336; Hinschius, I, S. 281; Hauck, IV, S. 138. 參照。尙 Cambridge VI, p. 39. 此調停員は反對の意見をもつそれぞれの黨派から選ばれたとあるが、實例を見ると、必ずしもさうとはきまつていない。

以上述べた三方式のうち、通常は第二の集票式 (*Forma scrutini*) が行われ、多数決もまた可なり、とされたのである。一一七九年の公會議は、教皇の選舉については「三分の二から選ばれた者」(*qui a duabus partibus fuerit electus*) を以て當選者となし、司教の選舉については「一層大にして且一層健全な部分の意見が重んぜらるることを要す」(*maioris et sanioris partis debet sententia praevalere*)⁽¹⁾ となして、質的に優れた多数の票を得た者を以て當選者としたが、更に後者については、一一一五年の公會議で、一層明確に「全部、または一層大なる部分、または一層健全な部分が同意した者が當選す」(*is ... eligatur, in quem omnes, vel maior, vel sanior pars consensit*)⁽²⁾ となして、全會一致と量的多数決と質的多数決とを認めることになった。ところが、全會一致はおろか、多数決でさえ中々困難な場合が多かつたらしい。前にも述べたアレキサンデル三世の選舉の際には、全會一致の投票のみを有効なりと、豫め協定しておいたにもかかわらず、票が三名の候補者に分散したので、何度かやり直し、その間に盛に折衝談合が行われて、順次に候補者の數を減らし、アレキサンデル一人に票を集める工作が幾日か行われたが、中々全會一致に到達しない。どうやらアレキサンデルが二十七票中の二十三票という絶対多数の票を集めることができたが、少数派が同調を肯じないで全會一致を成立させようとしないので、遂に二重選舉となったのである。それ故に、これに懲りたアレキサンデルが、少數が多数に同調しないために全會一致にならなかつた場合には、という條件付きで、やむを得ず三分の二の多数決を認めたのであるが、三分の二の多数決さえ中々困難な場合があるので、少數

の委員でよく話し合つた上で投票する調停式 (*forma compromissarii*) を認めることになつたのである。しかし調停員が妥協しないと、この方式をとつても、その目的を達せず二重選挙となることは、前に述べたインノケンチウス二世の選挙が示す通りである。

しかし幸にして、どうやら一同の意見がまとまると、集票式なら選挙人、調停式なら調停員が、一人一人候補者を名指して口頭で投票し、その票を集計し、司教選挙なら、更にその(投票者ならびに候補者の)質を判定して、ようやく候補者一名を決定し、最後に、これを厳かに宣言するのであるが、十二世紀中頃以來、この一人一人が投票するまでの段階を「ノミナチオ」(*nominatio* 指名)といい、最後の結果を厳かに宣言する行爲を「エレクチオ」(*electio* 選挙宣言)というようになつた。すなわち、廣義の「選挙」(*electio*)は「指名」(*nominatio*)と狹義の選挙、すなわち「選挙宣言」(*electio*)との二段階に分たれたのである。⁽³⁾ この「ノミナチオ」と「エレクチオ」とは、名稱も内容もそのまま、十三世紀中頃以後、ドイツの國王選挙においても行われたが、指名は、前からドイツで行われていた「イルヴェレン」(*irwelen* 豫選)と同じく、選挙人たち「全部の票を一つに統合する」(*dirigere omnium vota in unum*)ことを目的とする下相談であつた。⁽⁴⁾ このようにドイツではゲルマン法的に全會一致が要請されていたのに反して、教會では、一一七九年以來多数決が認められていたから、必ずしも全會一致であることを要しなかったが、最後に、後に行う「選挙宣言」(*electio*)においては、集票式なら、樞機卿なり司教座聖堂參事會員なりの全員が、調停式なら、調停員的全員が、揃つて異口同音に、前の段階で指名された候補者(*nominatus*)の名を厳かに呼びあげた。それ故に、これを「エレクチオ・コムムーニス」(*electio communis* 選挙合同宣言)とか「エレクチオ・ゲネラーリス」

(electio generalis 選挙總宣言) とかといひ、又、嚴かな儀式を以て行われたところから「エレクトオ・ソレムニス」(electio sollemnis 嚴肅な選挙宣言) とか「エレクトオ・ソレムニテル・プブリカータ」(electio sollemniter publicata 嚴肅に公告された選挙) といひ、動詞では「エレクトオ・ネム・ケレブラーレ」(electionem celebrare 選挙宣言を嚴肅にとり行ふ) といひたりした。⁽⁶⁾ところが、十三世紀頃から、多くの場合、一人が委任を受けて、これをなすようになったので、「エレクトオ・ベル・ウーヌム」(electio per unum) すなわち「一人による選挙宣言」といわれるようになった。⁽⁷⁾これもまた、十三世紀中頃以後、ドイツの國王選挙においても行われたが、一體「選挙合同宣言」とか「一人による選挙宣言」とかは如何なる意味をもち、何のために行われたのであろうか。

(1) Mirbt, Nr. 316, S. 172.

(2) Mirbt, Nr. 332, S. 181 f.

(3) 「指名」を動詞では *vota transferre* とか *convenire* とか *nominare* とかといふ。「選挙宣言」を動詞では *eligere* とした。Wreschko, S. 343—9. 参照。尙、筆者は從來、この狭義の *electio* を「投票」と譯していたが、この機會に「選挙宣言」と改めることにする。

指名と選挙宣言とに分れたことを史料について例示するならば、例えば、一一五一年のドイツ王コンラート三世 (Konrad III.) の教皇ユグケニウス三世 (Eugenius III.) への一書簡に、或司教座聖堂の家人數名が、武器を手にして、その聖堂付聖職者たちを脅迫し、ケルンの首席司教を司教候補者として「指名させ、どうにかして選挙宣言をさせた」(denominare et quodam modo eligere) とある。一一五五年に、教皇ハドリアヌス三世 (Hadrianus III.) は、ピアチェンツァ (Piacenza) の司教の選挙を承認した際、特に聖職者と市民代表が「全会一致で一人を指名し、これを司教に選挙した」(unanimitur conveniunt et eum in episcopum elegerunt) ことを強調してゐる。Wreschko, 中世における教皇と司教の選挙

S. 347 参照。

- (4) 町田「中世ドイツの國王選舉と多數決原理」一橋論叢、二四卷四號、七一頁、Wretschko, S. 350. 参照。
- (5) Wretschko, S. 355 f., 379. 参照。尙、十三世紀の教會法學者ホステイヘンシス(Hosteniensis)は、彼の著書 *Summa titel de electione* c. 13. に於いて「選舉合同宣言のやり方を次のように述べらる。ergo clamet aliquis "ay, oe, oe i", ut sic, voce finita, omnes simul clament "eligimus"; sic enim erit communis. Glorke, *Genossenschaftsrecht* III, S. 315 Anm. 212. 参照。
- (6) 集票式の時には集票員 (scrutatores) を、調停式の時には調停員 (compromissarii) を選任すると同時に、集票員なり調停員なりの中の一人に、選舉宣言を豫め委任しておくのが普通であった。Wretschko, S. 364 f.
- (7) *electio per unum* はインノケンチウス三世 (Innocentius III, 1198—1216) の時代に初めて行われ、その後、イタリア、フランス、ドイツ、ブリタニア、アイルランド、スペインなど可成りひろく行われた。Wretschko, S. 385—8. 参照。
- (8) 町田、前掲書、七二頁、町田「金印勅書における多數決原理の成立」法制史研究、5. 九頁、参照。
- ベネディクトゥス十一世 (Benedictus XI.) の死後、後繼者の選定に十ヶ月以上もかかったが、ようやく一三〇五年六月、ボルドー (Bordeaux) の大司教ベルトラン (Bertrand de Got) が集票式で三分の二の多數の票を獲得した。一一七九年の選舉法に従えば、これでベルトランの當選が確定したことになるが、それにもかかわらず多數派は、少數派をして改めて票をベルトランに投じさせて、全會一致となし、樞機卿フランシスクス (Franciscus Gaytanus) が、樞機卿一同の名において、ベルトラン改めクレメンス五世 (Clemens V, 1305—1314) の選舉宣言を行った。この

例を引いて、ブレスラウ⁽¹⁾ (Breslau) は、アレキサンデル三世(一一七九年)以後、全會一致がもはや選舉の有效性の要件ではなくなった後においても尙、結果的に全會一致となそうとするのが「選舉合同宣言」ないし「一人による選舉宣言」の意味であり目的である、と主張する。これに對してヴレチュコ⁽²⁾ (Wreschko) は、ブレスラウのように解釋すると、少數派が多數派に同調して全會一致となった時のみ、合同ないし一人による選舉宣言が可能であり、逆に又、實際は多數決で決定したにもかかわらず、選舉布告に「エレクトチオ・コムムニス」とか「エレクトチオ・ベル・ウーヌム」とあつた時には、常に少數派の多數派への同調があつたものと推定しなければならなくなるが、同調と、合同ないし一人による選舉宣言とは、無關係である。樞機卿會なり司教座聖堂參事會なりが法人的統一體と解釋された結果、その統一的意思を表示するために行われたのが「選舉合同宣言」ないし「一人による選舉宣言」である、と主張する。惟うに、ブレスラウの説は全會一致を強調するゲルマン法的解釋であり、ヴレチュコの説はローマ・カノン法的解釋である。この二つの相反する解釋が起り得る所以のものは、一一七九年の第三回ラテラノ公會議において多數決が認められた以後においても、まだゲルマン的團體意識が依然として強く支配していたところに、學者の學問的思考を通じて、ローマ法的な考え方が浸潤し始め、この二つの相反する考え方が同時に並び存していたために外ならないのであつて、この矛盾を綜合し統一しようとする努力の現れが、この「選舉合同宣言」であり、「一人による選舉宣言」であつた、と解すべきではなからうか。

クレメンス五世の選舉の場合と同様に、一一七九年の選舉法以後數世紀間、しばしば教皇選舉が全會一致で行われている。司教や修道院長の選舉も、多數決で十分であるにもかかわらず、全會一致しようとして、凡ゆる努力が拂

われている。⁽⁸⁾たとえば一二四三年のラングル(Langres)の司教選舉の際、多數派は「聖堂の平和のために」(paci et quieti ecclesiae)と稱して、多數派の候補者に投票することを少數派に懇請している。⁽⁹⁾又一二五六年のコヴェントリ(Coventry)の司教選舉が集票式で行われた際には、五十一票はロージャー(Roger Meuland)に、残り十票は他の候補者三人に分散した。六十一票中の五十一票を得たのであるから、ロージャーの當選は確定したわけであるが、それにもかかわらず、右の結果の公表を聞いたあとで(audita publicatione)、⁽¹⁰⁾少數派は多數派に歩み寄り(recedentes)、⁽¹¹⁾全部の者が全會一致で(omnes unanimiter……una cum aliis)彼(ロージャー)を司教に選ぶことに(in suum episcopum eligendum)同意しつゝ、⁽¹²⁾(consenserunt)。調停式の選舉の際にも、少數派の多數派への同調が要請されている例が、十三世紀前半のグレゴリウス九世の教令集の中に見出される。トゥールーズ(Toulouse)の司教の選舉にあたり、五人の調停員が選任されたが、その際「もしも五人の調停員が全會一致で一人を選挙することができなかった場合には、その中の意見が合致した三人に(tribus ex eis concordantibus)残りの二人は(reliqui duo)同調し(sequi tenerentur assensum)彼等三人の投票を承認しなければならぬ(electionem eorum ratam habere)」⁽¹³⁾という指示が與えられている。もう一つクレモナ(Cremona)の司教選舉の例がある。その司教座聖堂の參事會員四名(quadnor de ipso capitulo)と、その町の聖職者三名(tres de clero civitatis)、合計七名の調停員が選任されて、「七名中の少數は(minor pars illorum VII)多數に従わなければならぬ(sequeretur……maiozem)」⁽¹⁴⁾という指示が與えられた。ところが、七名中、四名は首席司祭に(quadnor in archiepiscopatum)、⁽¹⁵⁾二名は首席助祭に(duobus in archidiaconum)、⁽¹⁶⁾一名は他の者に(uno in alium)投票した。そこで少數は(minoris partis)

多數の判斷に歩み寄って (ad iudicium accedente maioris)、『その首席司祭を全會一致で選舉した (eundem archiepiscopatum concorditer elegerunt)』と記されてゐる。このような例は、この他にもまた枚擧にいとまがないほど見出されるが、何とかして少數派を多數派に同調させて、全會一致に漕ぎつけようとしているといふことは、當時既に法規の上では多數決が認められていたにもかかわらず、いかに當時の人々が、まだまだゲルマン的團體意識に支配されて、全會一致でないに満足しなかつたかがわかるであらう。

(1) Bresslau, Zur Geschichte der deutschen Königswahlen von der Mitte des 13. bis zur Mitte des 14. Jahrhunderts, 1898, S. 134 f. 註 Seppelt, S. 159 f. 參照。

(2) Wretschko, S. 372—5. (3) Wretschko, S. 373 f.

(4) “rogaverunt, ut paci et quieti ecclesiae providentes cum eis episcopum elegerunt.” といふが、多數派の懇請にもかかわらず、少數派が同調を肯じなかつたので、二重選舉となつてゐる。Wretschko, S. 343 Ann. 1.

(5) “Qui audita publicatione predicta ab huiusmodi sua nominatione penites recedentes, omnes unanimiter in dictam Rogerum una cum aliis consenserunt in suum episcopum eligendum.” Wretschko, S. 342 Ann. 2. 參照。このやうな例は、この他にも澤山あるが、十五世紀になつても尙、同調が行われたことは、次の例が示す通りである。すなわち、一四一六年のスイスのクール (Chur) の司教選舉布告によれば、十七票中、十二票が司教座聖堂首席司祭のヨハネスに投ぜられ、残り五票は散票であつた。結果の發表後、少數派五名中、四名までは多數派に同調したが、一名だけは遂にこれを肯じなかつた。Wretschko, S. 342. 參照。

(6) “et etiam statutum fuit expresse, quod si quinque electores in unam personam convenire non possent,

中世における教皇と司教の選舉

tribus ex eis concordantibus reliqui duo illorum sequi tenerentur assensum et electionem eorum ratam habere.” の文の中 p. elector (選舉人) は compromissarius (調停員) の意に用いられてゐる。Wretschko, S. 341 Ann. 1.

(7) “capitulum ……in quatuor de ipso capitulo et tres de clero civitatis potestatem eligendi pontificem contraherent expresso, ut minor pars illorum VII sequeretur in electione maiorem. habito ……de futuri pastoris electione tractatu, quum vota illorum scinderentur in partis, quatuor in archiepiscopatum, duobus in archidiaconum, uno in alium consentientibus, tandem ……minoris partis arbitrio ad iudicium accedente maioris, eundem archiepiscopatum concorditer elegerunt.” Wretschko, S. 341 Ann. 2.

ところが、教會法學者は、樞機卿會 (collegium cardinalium) や司教座聖堂參事會 (capitulum) をローマ法的に法人的統一體と考⁽¹⁾え、これを成員 (cardinales や capitulares) から遊離した別箇の觀念的存在となしたから、成員個々の意思表示は、それらの多數が一致したに過ぎない場合 (すなわち多數決の場合) は勿論のこと、たとえ全部が一致したとしても (すなわち全會一致の場合でも)、それは、どこまでも個々の意思の集積であり、複數意思であつて、それらが直に樞機卿會とか、聖堂參事會とかという統一體の一個の統一的意思となるわけではない。それ故に、集票式では選舉人の、調停式では調停員の、個別的投票 (electiones singulares) のほかに、更に樞機卿會なり聖堂參事會なりの團體それ自體の意思表示が必要となる。この事情を、ありありと具象的に現わしたものが、集票員に對してなす集票式 (forma scrutini) の投票の過程である。司教選舉の場合を例にとるならば、司教座聖堂參事會を構成

する成員であるカピトウラーレス (capitulares) 一同は召集を受けて廣間に集っている。ところが投票はそこで行われるのではなくして、一人一人別室に赴いて、すなわち「仲間の者たちから隔離され」(regreitur de eisdem fratribus)、全く自由な個人の立場で行われる。それ故に、その投票は、理論上も實際上も、純然たる個別的的意思表示であり、個別的投票 (electiones singulares) である。かくして投ぜられた個々の票 (vota singularia) が算えられ重さが量られると、⁽³⁾全部の者、又は大多数の者が望んでいる候補者は誰であるかが事實上ほぼ判明はするが、法律的には、個々人が投じた個々の票の集計が行われただけであって、まだ團體としての聖堂參事會 (capitulum) それ自體の投票は行われていないから、その候補者は團體から選舉された者とは未だいふことができない。そこで成員一同が揃って異口同音に (uno ore)、その候補者の名を嚴かに宣言する必要があるのであって、これによって初めて選舉は完了し、その者の當選が終局的に確定する。この最後の儀式的な設權行為が、すなわち「選舉合同宣言」(electio communis) といわれるものである。しかし、この場合には、司教座聖堂參事會という團體がローマ法的に法人的統一體と考えられているとはいへ、成員が全部揃って同一の行為をなすことによって初めて團體それ自體の行為となる、というところに尙、ゲルマン的團體意識が残っているが、これが更に一段とローマ法的に醇化されると、「一人による選舉宣言」(electio per unum) となる。蓋し一人が委任を受けて團體の名において選舉を宣言すれば、團體が選舉する、という觀念は最も完全に且具象的に表示されるからである。

これを教會法學者は説明して次のようにいう。「選舉は司教座聖堂參事會の權限に屬し、個々人に屬するのではなく (electio est penes capitulum et non singulos)」、しかし、個々人が合同して選舉するのである (et tamen singuli

coeigunt)」と。蓋し一個の團體 (universitas) である聖堂參事會 (capitulum) に法律上假りに「一人格が擬制される (figatur una persona)」が、それは肉體 (corpus) をもたぬもの (res incorporalis) であり、抽象的に (in abstracto) 存在する單なる「法的概念」(nomina iuris) に過ぎない⁽⁷⁾。従つて、それ自體として意思したり行爲したりすることができないから、實際には「投票という行爲は個人がなす」(actus eligendi sunt singulorum) より仕方がないが、この成員個々の行爲の結果を司教座聖堂參事會それ自體の行爲に變質させなければならぬ。そのため用いられるのが「司教座聖堂參事會の多教がなすところは (quod maior pars capituli facit) 司教座聖堂參事會の全體がなすところと看做される (totum capitulum facere videtur)」とす⁽⁸⁾。「法の擬制」(actio iuris) である。ところが、感官的な考え方に支配されていた中世人にとって、「看做される」(videtur) ということは、現實に肉眼でそう「見られる」(videtur) ということでなければならぬから、更に「一個の合同行爲」(communis et unicus actus) が現實になされなければならず、そのために、一同が異口同音に「選舉合同宣言」(electio communis) をなすのであるが、「人格」觀念の抽象化が十分でなかつた當時の人々に對して、「選舉」という行爲が一人格 (una persona) の行爲であることを納得させるためには、一人の生きた人間を拉しきまつて、選舉宣言をさせ、司教座聖堂參事會それ自體が選舉する、ということを目前にありありと髣髴させる必要に迫られ、「司教座聖堂參事會に代つて、その名において、一人によつて宣言」(pronuntiatio per unum vice et nomine capituli) が行われたのである。

ところが、法人論的立場に立つ教會法學者の説明と實際の選舉記録との間には、いささか異なるところがある。選舉

宣言は「司教座聖堂參事會に代つて、その名において」なされると學者は説明するが、實際の史料を見ると、更に又次のような言葉がこれに附加されている。例えば、集票式なら、選舉人である「すべてのカノニクスたちに代つて」(Pro omnibus canonicis)とか、又調停式なら、「余の同僚である調停員たち並びに聖堂參事會のすべての人々に代つて、その名において」(vice et nomine compromissariorum neorum et totius ejusdem ecclesiae capituli)という言葉が附加されている⁽¹¹⁾。惟うに、「指名」が多數決で行われた場合には、その候補者に投票しなかった者もいるわけであるが、最後の段階である設權行爲としての「選舉宣言」においては、指名の折に他の候補者に票を投じた少數者からも委任を受けて、すべての人々の名において、一人がすべての票を一括して投ずることによって、結果的に全會一致であったことを表示しようとするのである。多數決が法律上認められたにもかかわらず、その後も尙依然として同調義務を少數者に課して、何とかして全會一致の選舉にしようとする、あらゆる努力が拂われたことは既に述べた通りであるが、ゲルマン的全會一致の要請が如何に根強く残っていたかは、樞機卿たちを一室に閉ぢ込め肉體的に強要してまで意見をまとめさせようとする「コンクラヴァ」⁽¹²⁾(conclave)の制度が一二七四年のリヨンの公會議で制定され、教皇令「ウビ・ペリクルム」(Ubi periculum)を以て公布されたところからしても明らかである。同調義務を課したり、コンクラヴァの手段を用いたりしても尙且全會一致に到達しなかったものに、全會一致の外觀を興えて、ゲルマン的團體意識を満足させようとしたものが、この「一人による選舉宣言」(electio per unum)であつたといえるであらう。

これを要するに、外部からの干渉を排除しようとする數世紀にわたる鬭争の間に、次第に選舉權者の範圍が確定し、

早くも十二世紀に多數決が制度として認められ、更にこれを學問的に基礎づけるために、ローマ・カノン法學の精緻な理論が展開されたが、ローマ法の抽象論は、感官的で非合理的な考え方の強かったキリスト教的中世人にとつては理解し難く、ために神祕的表象的な表現を用いざるを得なかったし、ローマ法的な多數決を法律制度としては認めながらも、依然として、ゲルマン的團體意識と、それに伴う全會一致の要請に強く支配されていた當時の人々は、多數決で得られた結果を、更にもう一度ゲルマン法的意識の面で解釋し直して、ようやく納得したのであろうことが、選舉の方法や、その際に用いられた言語動作から推測されるのである。

(1) 一二四五年のリヨンの公會議で公布された教皇令の理由書の中で法人論が詳細に展開された。Gierke, *Genossenschaftsrecht* (以下 Gierke と略記す) III, S. 280 ff., S. 309 ff., 町田「多數決原理の展開」現代法學の諸問題、二九頁以下、参照。

(2) アレキサンデル三世とヴィクトル四世の二重選舉の前に書かれた皇帝派の樞機卿の書簡の中で述べられている集票式のやり方の説明の一句。Hinschius I, S. 264 Ann. 4.

(3) Innocentius c. 11 D. 63: et sic non tantum numerus, sed etiam auctoritas eligentium consideratur. Gierke III, S. 325 Ann. 247.

(4) 教皇グレゴリウス九世 (Gregorius IX, 1227—1241) はベネー (Bayeux) の司教座聖堂參事會が司教選舉を行った際、儀式的な「選舉合同宣言」(electio communis) が行われなかつたことを理由として、その選舉を無効なりとした。すなわち儀式的な合同宣言を設權行為となしたわけである。Wretschko, S. 380. 参照。

(5) Innocentius c. 13 X 1, 31 nr. 1: electio est penes capitulum, et tamen singuli coeligunt. Gierke III, S. 305

Ann. 178; S. 312 Ann. 203. 町田『前掲書』三〇頁、参照。

- (6) Innocentius c. 57 X 2, 20 nr. 5: cum collegium in causa universitatis fingatur una persona. Gierke III, S. 279 Ann. 102; S. 280 f. 町田『前掲書』二九頁、参照。

- (7) これもインノケンチウス四世の言葉である。quia universitas, sicut est capitulum, populus, gens et huiusmodi nomina sunt iuris et non personarum, ideo non cadit in eam excommunicatio, quia capitulum, quod est nomen intellectuale et res incorporalis, nihil facere potest, nisi per membra sua. Gierke III, S. 281; S. 310. 町田『前掲書』三〇頁、参照。

- (8) Gierke III, S. 305. 町田『前掲書』二二頁、参照。

- (9) Gierke III, S. 323 u. Ann. 244. (10) Gierke III, S. 315 u. Ann. 211, 212.

- (11) 一三三二年八月三十一日附の古文書には et pro toto capitulo et pro omnibus canonicis superius preminatus eligimus とあり、一二八六年七月十九日附の古文書には vice mea et nomine collegiarum meorum et concompromissariorum meorum et totius ejusdem ecclesiae capituli. といふ。Wretschko, S. 367 Ann. 1. 参照。

- (12) インノケンチウス四世 (Innocentius IV, 1228-1254) の時、後継者の選挙を迅速に行うため、前教皇死亡の地で直ちに選挙を行うとした。教皇令「ソニア・フレクエンテラ (Quia frequenter)」で定められた。(Feine, S. 282 参照) そこで、クレメンヌ四世 (Clemens IV) が一二六八年十一月二十九日に、ローマ北方のヴィテルボ (Viterbo) で死亡した時、右の規定に従って、直にヴィテルボで選挙にとりかかったが、意見が中々まとまらず荏苒日を空しうすること三年に及んだので、業を煮やしたヴィテルボの市民が樞機卿たちに壓力をかけ、ようやく一二七一年九月一日に、グレゴリウス十世 (Gregorius X, 1271-1280) が選挙されたが、十字軍に従って聖地にいたので、その跛階はようやく一二七

二年四月六日に行われた。實に三年半以上も空位が続いたわけである。そこで、位に即いたグレゴリウスは、選挙を促進する方法として、既に一二四一年に行われたことのある (Feine, S. 282 Ann. 8. 参照) コンクラーヴェを一二七四年の教皇令 (Ubi periculum) を以て制度化したのである。

コンクラーヴェ (conclave) とは、カム・クラーヴェ (cum clave)、「すなわち鍵 (clavis) をかけた (cum) 部屋」という意味であつて、當時イタリアの自治都市やドミニコ派の修道院で、選挙が終了するまで選挙人たちを鍵をかけた部屋に閉ぢこめておく慣行があつたが、これを教皇選挙に採用したものである。(Feine, S. 282 Ann. 8; Plöchl II, S. 78. 参照) すなわち、隣接する便所への通路と食事差入口としての窓を一つだけ残しておいて、ほかは窓もドアも全部密閉し、完全に外部から隔離された一室 (conclave) に、選挙人である樞機卿たちを閉じ込め、口頭たると文書たるとを問わず、外部との連絡を一切遮断して、その中で選挙の下相談をさせ、多数の意見がまとまらなう時は、粗食と空腹に耐えかねて、やむなく入室後、三日以内に (infra tres dies) 一同の意見がまとまらない時には、粗食と空腹に耐えかねて、やむなく妥協するやうに、その後五日間は (per spatium quinque dierum immediate sequentium) 毎日二食で、朝食をかねた共食 (in prandio) と夕食に (in coena) 僅か一皿ずつしか料理 (uno sole ferculo) が與えられない。このよくな一汁一菜式の貧弱な食事は、教皇に次ぐ教會最高の顯職にある樞機卿たちの美食に慣れた平素の生活からすれば、まことに耐え難い粗食であつて、相當な苦痛であらう。そこで、隔離生活と空腹に耐えかねて、我を折つて一同が歩み寄ればよいが、この期間が過ぎてても尙、自説を固執して敢て妥協しようとしなう者がいる時には、一層大きな苦痛を與えるために、その後は、一日の食事として、僅かにパンとブドー酒一杯と水 (panis, vinum et aqua) しか與えないで、やがて精根つきて、遂に妥協や讓歩が行われ、三分の二の多数決ないしは全會一致に到達するのを待つのである。(Mirbt, Nr. 367, S. 206, Hunschius I, S. 267 f.; Plöchl II, S. 78. 参照)